平成５年３月９日発行

鵠沼

久　久　比　奴　末

はまゆう　と　櫻貝　と
海光る　わが　故里

第　６　７　号

内容　鵠沼の思い出　（続）　若尾　肇

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保２年・1801）で、”くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。

鵠沼小学校の思い出・続き

若尾　　肇

学芸会

（第66号からの続き）

娯楽のなかった当時の鵠沼は、学芸会も村人たちの大きな憩いの場であった。当日になると、朝早くから村人たちが、三々五々それぞれゴザや座ぶとん持参で集り、会場は忽ち満員になってしまうので、遅れて来た人は、廊下側から立ち見をしなければならない。生徒たちは、自分の役柄を見て貰える楽しさ、役者のような衣裳を着られる嬉しさ、授業のない楽しさなどで、皆いきいきと眼が輝いていた。その点、今の子供たちは、満たされ過ぎて、却って足るを知るという喜びが少ないようだ。

幕引き係が紐をたぐると、幕がぎこちなく開く。観衆は、そんなことにはいっこう頓着なく、固唾を呑んで、背景はどんな絵かを見守る。大きな十五夜の月と山、それにすすきが何本か出ている。藤永君が出てきて、プロローグの説明をする。ちゃんちゃんこに大きな腹の山下君が尻尾を引きずり、腹鼓を打ち乍ら出てくる。観衆は一瞬しーんと静まりかえって、さて、物語はどんな展開になるかと、息をこらして見詰める。ざっとこんな光景が幕毎に見られたものである。

何といっても呼び物は、高学年の劇であった。一つ二つご紹介してみよう。舞台の右端には、唱歌隊が縦二列に並んでいる。当時は伴奏といえば、オルガンしかなかった。これはその一場面、唱歌隊がオルガンの前奏で歌い出す。「フーナサカヤーマヤー　スーギサカトー、ミーアトシータイテ　イーンーノショオー、ビーチュウーヲ　イーカデ　ツータエーントー、サークラノミーキニー　ジュージノーシー、テーンコーセーンヲ　ムナーシュウスルナーカレ、トーキニーハーンレーイ　ナキニシモ　アーラズー」

鎧兜に身を固めた児島高徳が、舞台中央に進みでる。部下が数名その横に膝まずく。背景は、ボール紙を絵の具で彩った桜の大木がある。彼は、舞台で客席を見渡すようにしてから、思い入れよろしく後ろ向きになり、腰の刀を抜いて、桜の皮をはがし、矢立を取って「天『こうせん』を空しうする勿れ。時に『はんれい』無きにしも非ず」と書いていく「かっこいいなぁ」というつぶやきが聞こえてくる。当時必ずといってもいいほど、受けた出し物には、「楠公桜井の別れ」がある。たしかこれは高等科の生徒がやったと思う。例によって唱歌隊が元気よく歌い出す。

「アーオバ　シゲーレル　サクライノー　サートノ　ワータリノユウマグレー　コーノシ

タカーァゲニ　コーマトメテー　ヨーノユクスエヲー　ツクヅークトー、シーノブ　ヨーロイノ　ソーデノヘニー　チールハナーミダカ　ハタツーユカー」

床几に腰を下ろした楠正成、その前にかしこまるわが子、正行、再び唱歌隊の歌、

「マーサシゲ　ナミダヲ　ウーチハライー　ワーガコ　マサツラヨビヨーセテー　チーチハ　ヒョーオゴニ　オモムーカン、カナタノウラニテ　ウチジーニセン　ナンジハ　コーコマデ　キタレードモ、トクトクカーエレフルサートヘー」

正行は、父正成に「私も父上のお供をさせてください」と何度も哀願する。が、正成は、「お前は、戦場に出るには若過ぎる。それより故郷へ帰り修業に励み、立派に成人してから、父の仇を取ってくれ。」と一振りの短刀を与え、「七度生まれ変わって、国に報いよう。この短刀を持って早く帰りなさい」という。正行は、それを押しいただいてゆっくり立ち上がり、何度か父の方をふり返りながら、舞台左手の袖へと消えていく。唱歌隊が「マータモ　フリクル　サミダーレノー・・・」と哀調をこめて歌えば、観客の中には、そっと目頭を押さえる人もある。といった具合であった。

次に我が学年の出し物を思い出すままに書いてみよう。前記の狸の役は、二年三年と必ず山下君がこれに当てられていた。理由は、私なりに考えると彼のイメージが他の人よりも合っていたこと、の他に、台詞のしゃべり方が「読み方」の時間に聞きやすい読み方をしていてこれが主役向きと判断されたのだろう。

一年のもうひとつの出し物は、男子は「こぶとりじいさん」正直爺さんは、三留君、欲張り爺さんは、若林君、鬼の大将はが加藤徳次君、私は、その他大勢の鬼の子分で、青鬼の方だった。二人の爺さんは、片頬にゴムまりを半分に割ったこぶをつけており、欲張り爺さんは、最後に鬼の大将から反対の頬にこぶをつけられてしまう。というものだった。三留君が鬼の大将の前で踊りを踊る場面で、何を思ったのか（テレ隠し？）げらげら笑い出したら、舞台の袖で、鈴木晴雄先生が「笑っちゃいけない、笑っちゃいけない」と必死に制止しておられたのが、妙に印象に残っている。どういうわけか、このお爺さん役も、何度かの学芸会には、三留君がなることに決まってしまい、彼の仇名「おじい」は定着しとうとう湘南中学まで持ち越されてしまった。女子の一年での出し物は「あの町この町」と「流れ星」が印象に残っているが、「あの町この町」の劇では、ストーリーよりも歌の

メロディーが郷愁をそそるものがあり、特に榛葉イトさんが、顔中口という感じで、大きな口をあけて歌い、歌うのが嬉しくてしょうがないという感じを体全体で表しているように思えた。「流れ星」は、「あの町この町」の中の一場面だったか、独立した別の劇だったか定かでないが、とにかく天井から流れ降りた星が、下界の人々の暖かい人情に触れてお礼のしるしに天上の舞を舞って、天界に帰る、という至って単純な筋であったが、金ピカの紙を貼り付けたボール紙の星形を頭につけた上郎さんが、舞台中央で踊り始めると舞台の薄暗い電球ながら、観客は、お伽の国に引き込まれるような気持ちになって観て　いた。当時金ピカ衣裳は、不思議な魔力で観衆を魅了するものがあった。当時の客席は、立錐の余地もない満員で、廊下側も三列にも四列にもなって立ち見の人がひしめき合い、後ろの人たちは爪先立って背伸びをしたり、子供を肩車してやったりして見ていた。それだけに、幕の合間に便所へ行くにも一苦労で、次の幕が開かないうちにと心をせかせながら用を足していたようだ。それはさておき、この「流れ星の歌」は、我々が八幡先生の担任になってから、毎月、その月生まれの人のための誕生会をやったが、三年のある誕生会で隠し芸をやらせたとき、「デンキヤのマーチャン」こと、関根正雄君が歌ったことがあった。

クーライ　ミーソオラーノ　ナーガァレーボォシー　ドーコヘ　ナーニシーニイークノデショー　サバクノハーテーェノ　ノーノオハーテェノー　ダーレモシーラナーイ　ミーズウーミーニー　ノードノカワイタ　オホシサマー　オーミズヲ　ノーミーィニー　イークノデショー

彼が眉と眉の間に皺を寄せ、口をオチョボ口にして一生懸命歌ったのが、昨日の事のように思い出される。誕生会といえば、三留君が木琴を持ってきて、「海」（松原遠く・・・）を弾いたことがある。当時は我々生徒の中で楽器を弾ける者は殆どなく、皆感心して聞いていた。今から思えば、楽譜通り単音で叩いただけだったが、私にとつては、驚異であった。（今では幼稚園児がやっている。）これで八幡先生からほめられ次の時は、山口清君が持ってくるようになった。

話は外れたが、学芸会でも、一級下の男の子で、バイオリンを弾いた子があった。教育パパだったのか、この子の父親が、楽屋裏で一生懸命、出番前の稽古をつけていたが、

我々一般生徒にとつてバイオリンなどという楽器は、庶民の手の届かない高級品というイメージが強かったので、幕が開いた途端、しーんとなって耳を傾けた。曲目は「荒城の月」音が小さく、非常に聞き辛かったし、単調な調べだったようだが、我々はその時は「バイオリンんが弾ける！すげえなあ」なんて思いながら聞いたものだ。

学芸会の主役を割り振られる人は、毎年きまっていて、三留、山下、渡辺、杉浦などの諸君だった。四年の時だったか、猫の被害を受ける鼠たちが、どうやって猫の首に鈴をつけるかという劇で、これはオペレッタ形式になっており、まず、唱歌隊が歌う。

ネコトーネーズミハ　カタキトカータキー　ネコニオメメガ　ナァケーリャヨイヨイヨイ、コリャドッコイドッコイドッコイセー（全員）鼠たちは、知恵者の鼠を囲んで催促する。チーエノフクロハ　マーダカイナー（杉浦）知恵鼠が答えて　マテマテ　ソンナーニー　イーソイデーモー　チーエノフクロハ　アーキャシーナーイー（渡辺）

これをさんざん練習させられたが、私の役割はチュー太というその他大勢の役で台詞といえば「ソレーガーイイ、ソレガーイイ」と一回言うだけだった。それでも楽しみにしていたのに、三日前から熱を出し、当日は、小林正志君が代役になってしまった。

私が、初めて主役をもらったのは、五年か六年の理科の実験で、杉浦君が聞き役、私が説明役になった時であった。内容は、フラスコの中に石灰石を数個入れ、上から稀塩酸を注ぐと炭酸ガスが発生し、火のついたローソクを入れて、それが消えることで炭酸ガスのあることを確かめるという至って単純なものであった。また、当時はマイクなんてハイカラなものは無かったから、肉声で大きな声を出さねばならず、声を出すのが精一杯で、とてもしゃべり方まで手が回らず、顔をくしゃくしゃにしてしゃべる者もあった。私も、ご多聞に洩れぬくちだったが、石灰石に稀塩酸を注いで、ぶくぶく泡立ったとき、杉浦君が間眉と眉の間に皺を寄せ、あごを突き出すようにして、「マルデフットーシテイルヨーデスネ」と言ったせりふとその時の光景が思い出される。恐らく私の顔も、もっと思いつめたような顔をし、国語読本を読む時のような調子だったろうと想像される。

昼弁当は、見に来た家族と客席で一緒に食べるのが楽しみだったが、どの家庭も、この日ばかりは重箱弁当に、卵の厚焼きに煮しめなど豪華に盛りつけてあった。ごつた返す客の間を遠慮しいしい通るとき、老婆の着た羽織からナフタリンのにおいがぷーんとして

きたのが、懐かしい思い出の一つでもある。本当に良き時代であった。

遠　　足

一年生（昭和５年）

当時の遠足は、文字通りの遠足であった。先生が先頭にたつて、生徒は二列になり金魚のうんこよろしく、しゃべったり、歌を歌ったりして、わいわいがやがや言いながら楽しく歩くのである。

当時の道路は自動車は殆ど通らず、たまに見かけると「あ、自動車だあ！」と好奇の目で見るほどであった。そこで家を出るときは「道は真ん中を歩かないで、自転車にひかれないように」など今の子供には奇異に感じるような注意を受けたものだ。

一年の遠足は、片瀬の龍口園であった。関根肇太郎先に引率されて、学校から江ノ電鵠沼駅に向かう。「今日は『電車』に乗れるんだ」そんな気持ちかみんなをいやが上にもうきうきさせる。当時の鵠沼は特殊な別荘地を除いては農家が多く、近代文明の恩恵に浴することは滅多になかった。

「ティン、ティン、ティン・・・」運転手の鳴らすのんびりした音か響いてきた。我々が『ちんちん電車』と呼んでいた江ノ電が入ってきたのだ。当時の江ノ電は連結車などはなく、一輌編成である。運転席は立ち放しで入口はドアがなく、風が運転席を通って左右に吹き抜けていくものだが、今から考えると冬など運転手さんはさぞや寒かっただろうと同情される。早く乗った者は窓側を向いて横長の座席に立て膝をし、外の景色を見ようと未だ走らぬうちから胸を躍らせている。中々走らぬと思ったら、反対側に藤沢行きの電車が着いた。単線なのでここですれ違うのだ。それでも未だ走らない。後ろを見ると、車掌さんが外に出て汗だくでポールを電線に付けようとしている。昔の電車は長いポールを使っていたので、時々外れてしまい、その度に車掌さんは汗をかきながら、狙いを定めてポールと電線をつなぐのに苦労していた。「ティン、ティン」いよいよ出発だ。電車は「ガタン」と大きく揺れ、乗客の体は一瞬がくんとなる。今のようにスムーズな発進ではなかったが、これは生徒にとつては『押しくら饅頭』をしているようで「うわーっ」と声を上

げて喜んでいた。電車はゆっくりと動き出す。家や松ノ木の狭い間を通り抜けると、目の前がぱっと開けて境川の鉄橋にさし掛かる。江ノ電は藤沢 —— 鎌倉間の僅かな距離の中で、乗客の目を楽しませてくれる電車であった。この電車に乗ると、

今は山中今は浜　　今は鉄橋渡るかと
思う間も無く　　トンネルの
闇を通って　　広野原

この歌さながらの楽しさを味わわせてもらえた。やがて狭い民家の間を通って江の島駅に着く。木の柱に長い屋根の付いた駅で電車を下り、道路を横断して暫く歩くと、日蓮上人開祖の龍口寺の山門に着く。五重塔を見上げながら上人が斬罪になろうとしたとき、振り上げた武士の刀に突然雷が落ちて、刀を寸断してしまい、上人の徳に打たれてついに切ることが出来なかった、という話を聞かされ「偉い人だったんだな」との感銘を受けた。
五重塔は一番上に上がると、横風に塔がゆらゆら揺れるような感じで怖かった。間も無く危険ということになって、上がれなくなったという。お寺の上の方に上がって行くと直ぐ龍口園になる。ここはお寺の裏側から、エレベーターで直接上がることも出来たが、このエレベーターも間も無く老朽して使えなくなってしまった。

龍口園は猿や孔雀がわずかにいるちゃちな動物公園であったが、生まれて初めて学校外の公園で、学年全体の友達と集団で遊べる楽しさは満喫できた。特に猿が歯を剥き出して喧嘩し、やけくそに木を揺さぶったりするとみくな大喜びしていた。

ともあれ、この程度の遠足で満足できたのは貧乏国時代の特権といえようか。

二年生（昭和六年）

二年生の遠足は一年より少し距離が伸びて江の島行きであった。
当時の江の島は、木製の桟橋が掛かっていたが、橋の入口に小さな料金所があり、大人五銭、子供三銭の渡橋料を払ってから渡るのである。当時は誠にお粗末な橋で、あちこち腐って隙間だらけになっており、下駄をからんころんいわせながら歩いたが、現代の頑丈なコンクリートの橋と比べて、纏綿たる情緒があった。島に近付くと満潮時には橋の下で海水が「ざぶん、ざぶん」と音を立てて波立っているのが隙間から見え、海の上を渡っているんだとの実感が湧いた。

島に第一歩を踏み締めると、江の島神社への参道が真直ぐ上り坂になっていて、道の両側には土産物、茶屋、饅頭屋等が軒を連ね、店の前には頭を桃割れに結った女の子が一斉にかまびすしく行き交う人々に声をかけるのも江の島名物の一つであった。

「どぞ、お入いんなってらっしゃいまし、絵葉書などいかがでございますか。楽しい貝細工もたくさんございます。見るも目の法楽でございます」

「どぞ、お入いんなってらっしゃいまし、奥に見晴らしの良いとこがございます。景色を眺めながらお茶などいかがでございますか。さざえの壺焼などございます」

「えー、出来たてのお饅頭はいかがでございますか。おいしいお饅頭でございますよ。どぞ、お買いになってらっしゃいまし」と一斉に囃し立てる賑やかさは、独特の江の島情緒であった。また、旅館の番頭さんは揉み手をしながら、数名のクループに米搗きバッタよろしく体を九十度折り曲げて、「はい、奥のお座敷は絶景でございます。とぞ、ご一服なさって下さいまし」といいながら、数十米もついて歩き、「お帰りをお待ちしています」と言ってはまた次のグループに声をかけていく。現在の建物設備とは雲泥の差であったが当時の情緒は人々に心の安らぎを与えてくれた。今の味気なさは寂しい限りである。

江の島神社は土産物店街を通り抜けて階段を上がると、立派な社が威厳をたたえて私たちを見下ろしているように感じた。それから島の中央の尾根伝いに中の院、奥の院と分かれているが、その途中にくびれた部分かあり両側に海が見えるが、その手前と向う側とは地質が全く異なり、別の二つの島がくっついたようになっているという。

奥の院の参詣を済ませて少し歩くと、岩を刻んだ急傾斜の階段になっていて、そこを下りていくと広い岩場に出る。岩場の向こうには太平洋が開け、大きな波のうねりが岩場に当たっては豪快な波しぶきを上げていた。

岩場のところどこめには、岩を乗り越えた波で小さな池ができており、中には取り残された小魚、たこ、蟹、いそぎんちゃく、うみうしなどが泳いでいたので、皆大喜びでそれらのものをもの珍しげに眺めていた。誰かがふざけている中にコロンで脛を藤壺の殻で切り、大袈裟に泣き出し、「血んが、血んが」と叫んでいると先生が飛んで来て「なーんだこんなもの」と言ってその血をなめてしまった。岩場を更に奥に進み、短い岩のトンネルを潜ると岩屋（洞窟）の入口にさしかかり、板敷の通路にしめ縄が張ってある。入り口で

赤い袴の稚児さんから小さなローソクを買って洞窟に入る。ほの暗いローソクの明りを頼りに進むと、入口は広いが直ぐ二またに分かれ、奥に行くにつれて次第に狭くなって、中ほどにこの二つを結ぶ、かがんでやっと通れる程の低いトンネルがあり。『安産の胎内潜り』と書いてある。突き当たりは低い木格子で仕切られ、奥に弁天様が祭ってあった。何か神秘的な感に打たれ恭しく拝んで来た。この岩屋は、風化が進んで崩れる危険があるので、今は入れないが、当時の我々には別世界を探検するような楽しさが味わえた。

三年生の遠足（昭和七年）

三年には更に距離が伸びて鎌倉行きである。例によって江ノ電の旅は今度は七里ケ浜まで続く。唱歌の『鎌倉』の「七里ケ浜の、磯伝い・・・」の歌のとおり、波打ち際に沿って稲村が崎に向かう。切り通しの手前を右に出て、新田義貞が黄金造りの太刀を投げ入れたという岬では「新田義貞はしゃがんでいたんだべか」「ばーか、しゃがんでいたらうんこが出ちまわあ」、など他愛ないことをしゃべりながら、極楽寺を通って長谷に向かう。長谷では恐い感じの観音様より、路座の大仏のふくよかな顔が印象が強かった。大仏様の胎内に入って行った斉藤俊男、大谷隆の両君が背中の明かり取りのところで手を振って「早くこうよーう。たっけーぞーう」と怒鳴っていたのを思い出す。そのとき、「遠足や、大仏様に、入りけり」ふとこんな句が浮かび急いで書き付けた。土産店に大仏様を売っており、黒色のやや大きめのものは五銭、十銭の金色の像は小さかったが、奮発して十銭のにした。

この像は、わが部落、堀川の尼寺さんが、四月八日の花祭りに、張り子の白象を子供達に引かせることになり、背中に乗せるお釈迦様がないというので、この大仏を寄付してそれが町内を練り歩いたが、鵠沼銀座に差し掛かったとき一人の老婆が「ありがたや、ありがたや」と言って涙を流して土下座していたのを見て、何か嬉しいような後ろめたいような感じであった。

さて、次は鶴岡八幡宮である。だんかずらを通り抜け大鳥居を潜ると太鼓橋があり、代わる代わる駆け上がろうとするが、大人には容易でも子供には難しい。だがこつを覚えると後は楽になるようだ。橋の右手の池の前で手を叩くと大きな鯉が近寄ってきて、餌を下さいとねだっている。みんな面白がって次々手を叩いていると、近くにいた大人の人が「そ

んなに手ばっかり叩くと、鯉が『騙された』と思って、もう来なくなるよ」と言ったので皆顔を見合わせて、手を叩くのを止めた。

本殿に向かって歩いて行くと舞殿があり、昔、静御前がこの舞殿で源頼朝を前にして、「しずやしず、しずのおだまき繰り返し、昔を今になすよしもがな」と歌いながら、舞を舞ったのがここだと説明されて、一生懸命ノートを取っていた女学生の一団が印象的であった。周囲には鳩がたくさんいて、子供達が一皿二銭？の豆をまくと急いで駆け寄り、せわしげについばんでいた。私も豆を掌に乗せてしゃがんでいると、近くの鳩が数羽それをつつき始めた。くすぐったかったが鳩が可愛いので、豆がなくなるまで我慢した。

暫く鳩と戯れた後、本殿に上がる階段の左手前に銀杏の大木があり、大きな幹にしめ縄が張ってあった。源実朝が甥の公暁にここで殺された、と誰かが説明していたが、先の女学生がこひこでも熱心にノートを取っていた。階段を上がり大きな鰐口を振ってお参りを済ませると、今度は鎌倉宮に向かって歩く。ここは大塔宮護良親王が祀られているそうだが、何となく陰気臭く暗い感じてあった。

先ず親王が幽閉されていたという土牢を見学する。周囲は樹木が多くて薄暗く、牢の中を覗くと、こんな中に閉じ込められたらたまらないだろうなあ、と心から同情が沸いてくる。親王は足利直義の命令で、この中で殺されたそうだが、振り下ろした第一刀は口で受け止め、憤怒の形相が物凄かったので、中々首が取れなかったが、やっとの思いで首を切り落とし、その首を抱えて報告に行く途中、かっと見開いた生首の目の恐ろしさに堪えかね、通りすがりの竹藪に捨てたという。その竹藪も見学したが、土牢の直ぐ近くで捨ててしまったことになるが、こんな淋しい山道を生首を抱えて歩くのは、誰でも我慢し切れないだろうとの実感をまざまざと味わった一時であった。

四年生の遠足（昭和八年）

この学年から、東海道線を利用する汽車の旅になる。行く先は大磯の高麗山千畳敷きである。（現在の湘南平）八幡先生の説明の中で「大磯には特にお土産という程のまのはありませんが、『さざれ石』という砂糖を固めた石ころのような菓子があります」と言われた言葉が未だ耳に残っている。小田急本鵠沼から電車に乗って藤沢に向かう。藤沢駅には浮き浮きした生徒たちが次々に集まってくる。全員揃ったところでホームに入る。汽車が

来るのが待ち遠しい。はしゃいでいるうちに、轟々と地響き立てて、大きな鉄塊のような機関車がホームに突入してくる。ホームでは制服に制帽を付けた駅弁などの売り子が首から弁当などを載せた箱をぶら下げてよいしょと立ち上がる。　当時の東海道線は、今と違って誠に悠長であった。列車が到着すると駅のウグイス・アナの名調子のアナウンスが始まる。「フジサワー、フジサワー、エノシマデンシャセーン、オダワラキュウコウデンシャセンユキ、ノリカエー、ノリオリハ、ゴジュンニオハヤクネガイマス」当時はどの駅でもご自慢のウグイス・アナを抱えてそれぞれ特色のある美声を競い会っていた。（後に我がクラスの須藤信一君も大船駅で美声を誇っていた）
駅弁売りは、数名が列車の窓際を歩き回り「えー、べんとべんとーう、サンドイッチにしんぶん、マッチー」「えー、お茶ーお茶ー」と独特の売り声を競い、赤帽さんは客車の降り口で、客のスーツケース等の荷物待ちをする。「ボオーッ」号笛と共に、がたんがたんと客車が大きく揺れて、おもむろに走り出す。今のようにすうーっと出てしまわないから発車してから弁当を買うこともできた。列車は我らの喜びを載せて、次第に速度を増し、電柱や藁葺屋根の農家や、田んぼの中のキッコーマン醤油、カルピス、中将湯などの広告が次々に現れては、後方に消えていく。がたがたごとん、がたがたごとん、独特のリスムで長い相模川の鉄橋を渡るともう大磯は近い。駅を降り例によって二列になって東海道を平塚の方に少し戻ると高麗山の上り口に出る。細い山道を楽しく談笑しながら上がって行ったが、楽しいときはどんなことでも可笑しくなるものだ。この時もごく単純なことでげらげら笑っていた。笑い上戸の横綱は、一番チビの大沢秀次郎、小早川興の両君だ。この二人は一寸した仕種で笑い転げていたが、突然大沢秀次郎かくしゅんと青い鼻汁を出して笑い始めた。何事かと思ったら、前を行く八幡先生のズボンの尻の皺が、歩く度に右に寄ったり左に寄ったりするのが可笑しいというのである。こんな他愛のないことに可笑しさの材料を探していると、遠い道のりもあっという間に終わってしまう。尾根伝いに木立を通り抜けて、少し歩いたと思ったらもう千畳敷が開けて見えた。頂上は千畳敷きの名の通り、野生の芝の広場のようだ。そこで休憩、昼食となった。

弁当は思い思い母親の心ずくしの料理が盛られていたが、今の教条的な教育者が心配するような差別意識はなく、欲しいものを互いに交換したり、分けてやったりして、変なひ

がみを持つようなものは見当たらなかった。むしろ親の心ずくしを満喫する機会ともいえた。今は画一的教条的な理屈の教育が多く、人情面が置き去られている。

遊んでいる時、どうした弾みか大沢秀次郎が灌木のまばらな急斜面を転げ始めた。それを見た坂倉校長は、さっと顔色を変えて、どたどたとその斜面を駆け降り、つづじの木に引っ掛かっていた大沢君の手を引いて「気を付けなきゃだめじゃないか！」とこっぴどく叱りつけていたのを思い出す。昔の先生は、生徒が危険状態に陥ると、本能的に我が身の危険を顧みず、飛び込んでいく風潮が今よりずっと強かった。

五年生の遠足（昭和九年）

四年までの遠足に比べ、ずっと遠くに行く本格的な遠足だという実感が湧いたのは、裁縫室で先生の説明を聞いたときである。この時は担任の他に桜本先生、鈴木先生、関根先生まで来られ、実地調査をした桜本先生が、説明するのが嬉しくてたまらないという顔で「みんなの行くところは箱根です。箱根は温泉の豊富な山です。みんなが通るところは麓の方から、湯本という所を通って ― 地図を指しながら ― ここが塔ノ沢それから太平台を通って小湧谷・・そして強羅へ出ます」

皆の目は、未知との遭遇を期待するかのような強い輝きをもって、一語一句聞き逃すまいと先生の指す地図の上に釘付けになる。「箱根の山は火山ですから、初めにできた火口の回りの山を外輪山と言いますが、箱根の中で一番高いのは神山、そのほか駒ケ岳、二子山、早雲山などがあり、これらをひっくるめて箱根山と言います」話は更に続く。「私たちは早雲山の下の方の大湧谷という所に行きますが、ここはあちこちに白い煙が出ていて丁度ゆで卵のような臭いです」本当にそんな臭いがするのかな、と未だ見ぬ現地を子供なりに想像する。突然先生の顔がにこやかに崩れて語調が代わり、「二子山というのはね、同じような山が仲良く二つ並んでいてねえ、みんながお便所でしゃがむでしょ。そのときのお尻の形が丁度逆さまになったような山なんだよ」「わーっ」と笑い声が裁縫室に響く。この時間だけは、毎日の授業時間の十倍以上の真剣さで、一生懸命聞いていたようだ。

待ちに待った当日、この日ばかりは不思議と午前四時半ごろぱっと目が覚める。すると台所の方からジューッという卵を焼く音が聞こえてくる。昔の母親は大変だった。朝早く起きて松葉やそだを焚き付けにし、煙にむせながら飯を炊く。次に釜から『おき』を取って

七輪に火を起こしおかずを作る。ということを日課として当たり前の機械的に繰り返していたんだなあ、としみじみ懐古される。
例によって藤沢駅に集合、何といっても皆の心が楽しく浮き浮きするのは、この時である。次々に集まってくる友達の顔は、一様に晴れやかでにこにこしている。山森君が、特に嬉しそうにやって来た。「よーう、おはよーう」と言いながら、お互いに両手を肩にかけて、ぴょんぴょん跳びはねていた。
時間になり二列に並んでホームに入る。列車が来るのが待ち遠しい。先生方も楽しそうに生徒に冗談を言っては笑わせていたが、当時の遠足は、先生にとつても楽しかったようだ。一張羅の背広を着て、ソフト帽を粋に被った先生が多かったのを思い出す。（鈴木春雄先生は鳥打帽であったろうか？）
どこからどこまでだったかよく覚えてないが、バス四台を連ねて走った時のことである前のバスの運転手が、子供好きなのか、わざとバスをジグザグに運転したので、後ろから見ると子供の体がバスの曲がる度に右へ左へと傾いて、中できゃあきゃあ喜んでいるのが手に取るようによく見え、「こっちもやってくれないかなぁ」と羨ましくてならなかったバスを下りると渡辺、榛葉という面々が楽しくてしょうがなかったという表情で、げらげら笑いながら身振り手振りでその状況を説明してくれたので、益々羨ましかった。こちらの運転手はというと全くのマイペースで「子供騙しの運転なんか興味はねえさ」とばかり苦虫を噛みつぶしたような顔で、我等の願望を全く無視した運転だったのが妙に恨めしかった。
強羅公園を後に、急傾斜の道をはあはあ息を切らせながら上って、大湧谷に出る。先生の説明通りのゆで卵の臭いが鼻を突く。「うーっ、くせえ」誰かが鼻をつまむと、次々に真似をする。私にはそれ程嫌な臭いではなかったが、皆がやるので大袈裟に鼻をつまみ、「おーくせえ」と真似をしていた。芦の湖に出て湖畔を歩き、大きな杉木立を通り抜けて箱根関所跡を見学、電灯も何もなかった頃は、夜はさぞかし怖かっただろう、などと考えながら歩いていると、旧東海道の石畳に出た。端の方は所々に苔がむしていて、昔、ちょんまげを結った武士や飛脚、杖を手にした白装束の巡礼、雲助にからまれ真っ青な顔でおどおどしている気の毒なご新造さん、人の良さそうな番頭さん、毛槍を先頭に威厳

を誇示する大名行列、空威張りする奴さん、手甲脚半に三度笠の遊狭人、手に手を取って駆け落ちする大店の娘と手代等々がこの苔むした石畳を、今の私と同じように踏んで通ったのかなあ、との感慨が次から次に湧いて来た。

箱根土産の中で、祖母に買ってきた竹製の杖を祖母に渡したとき、祖母が心から喜び、「ほんに、ようまあ気が付いたこと」と嬉しそうに何度も言って、片時も放さず使ってくれていたのが今になって懐かしく蘇る。

六年生の遠足（昭和十年）

六年生の遠足は、日金山十国峠であった。今度は東海道線で湯河原まで足を伸ばす。この頃は東海道線も電化されて、ＳＬに取って代わったのが電気機関車であった。今でこそＳＬは懐古趣味の人には、珍しさか先に立って人気があるが、当時のＳＬは煤煙で服が汚れたり、発進の際の進み方も滑らかでなく、電気機関車の方が文明開化の恩恵に浴しているという気分が味わえた。ドアは味気ない自動ドアではなく、乗客が開閉しており、相変らず弁当売りの小父さんは、列車が発進してからも、しばらく列車について歩き、窓から金を受け取ったりしていた。

例によって車窓から眺める田園風景にも、広告の数が増えたようで、海軍の礼装のマークの仁丹や征露丸（昔はこんな字であった）などが目に付いたように思うが、私にはやはりカルピスの特異なマークが印象的であり、いまだに目に浮かぶ。小田原を過ぎ早川の鉄橋に差し掛かる頃、ソフト帽の桜本先生が、にやにやしながら我々の席に割り込んで来て（この頃は座席はがら空きの時が多かった）若尾君、次の根府川っていうのはね、ここに来るとみんな『ねぶ』たくなるから『ねぶかわ』っていうんだよ。知ってるかい？」「わーい、先生嘘ばっかり」まわりの生徒が囃し立てる。先生は大真面目な顔で「嘘なんかつかないよ。ホントなんだよ・・」昔の先生はこのような時、今の先生よりずっと身近な親しみを感じさせる人が多かった。

騒いでいるうちに湯河原到着、名残惜しげに列車を降り、日金山に向かってバスで上り始める。誰かが「あ、猿がいる」とすっとんきょうな声を出した。指さす方を見ると左手の木の陰で一匹の猿がもの珍しげに「あれが人間という動物か」というような顔でこちらをじっと見ている。バスは一瞬停止、野生の猿を見たのはこの時が初めてであった。

「引っかかれるといけないから、手を出しちゃあいけないよ」すぐに桜本先生が注意する。途中バスを降りて急な坂を上る。　クマザサ、　ホイサッサ、　カゼフキァ　ホイサッサ、　アノコーニ　コノコー　　ホイサッサノ　ホイサッサ　サンキラコワイ、　ヨケーヨケー　ススメー　　誰かが『兵隊ごっこ』の歌を歌い始めた。一人が歌い始めると直ぐに全員が唱和する。みんな底抜けに明るい。一人の落伍者もなく熊笹をかき分けながら、あっと言う間に頂上に着いてしまった。頂上は十国峠といってここから相模、駿河、甲斐等、昔の十か国が見渡せるという。

その日もよく晴れていたので、三百六十度の大展望が開け、駿河湾と相模湾が同時に見えて、湾岸の平地にはマッチ箱のような町並みが見下ろされ、北側には富士の山が優雅なすがたを見せており、腕白な生徒一同もしばし声もなくその壮大な光景に見とれていた。

後日、この時の作文を書かせられ、私はあまりにも雄大な光景に呑まれたので、どこから書いて良いか分からず、大いに戸惑って結局支離滅裂になっいしまったが、女子の雨宮さんの作品が選ばれ、朝礼のとき全校生徒の前で読んだのを聞くと、情景描写が抜群で、これはとても叶わないと脱帽させられたことが思い出される。

昼食後の休み時間に熊笹の生えている斜面に出ると、非常に枝振りのよい灌木があったので、母に土産に持って帰りたいな、と話していたら、近くにいた運転手さんがナイフを出して「このへんからでいいかい」と言いながら切り取ってくれた。（この当時は、未だ『花泥棒は罪にはならない』というおおらかな良き時代であった。）私はまるで宝物でも取ったようにそれを後生大事に抱えていた。「若尾君、良いもの見付けたね」八幡先生から言われ、皆からも羨ましがられたのがとても嬉しく、内心の嬉しさを隠せなかった。時間はあっという間に過ぎ、再びバスに乗って熱海に向かう。再び車内は合唱が始まる。

鳴ーくやひーばりの、　こーえ、　うららかに
　　かーげろう、　もーえて、　野ーは晴れ渡る
いーざや、　我ーが友、　うーち連れ行かん
　　きょーおは、たのーしき、　遠足の日よ

当時の熱海は瓦屋根の旅館が立ち並び、なんとなくのんびりした温泉町という風情があった。我々は『大野屋』という看板の、熱海では屈指の大旅館で『千人風呂』に入浴することになっていた。「うわー、プールみたいだな」生徒一同大喜びではしゃぎながら、浴槽の中で水を掛け合ったり、泳いだりしていた。時間が早いので、他の入浴客はは一人もおらず気楽である。それぞれ上気した顔で風呂から上がり、集合までの時間を売店で土産物を物色する。売店には地味な着物に赤襷をかけたおねえさんが、盛んに購買意欲を掻き立てるように話し掛ける。「ねぇ、これ買ってらつしゃいよ。お姉さん喜ぶわよ」と赤い西陣の財布を見せる。「僕、お姉さんいないもん」「じゃあ、これどーお、弟さん喜ぶわよ」「僕、弟もいないもん」「あんた、一人っ子なの？」「そうだよ」

会話の間にも何を買おうか考えていた。名入りのカラフルなタオル、ハンカチ、扇子、蛇のおもちゃ、一口羊羹、温泉饅頭、文鎮、達磨落とし・・・全く目移りしてしまう。杖は去年買ったし・・母にはもう生け花用の良い枝を取ったし、そうだ、父が羊羹が好きだから、みんなで食べられるように一口羊羹にしょうっと。ところが五十銭のと一円のとがあった。迷った挙句、「五十銭のと一円のと、どっちが得かな？」「そりゃ、一円の方が得だわよ。お父ちゃんも、お母ちゃんも喜ぶわよ」「じゃあ、一円のにきめた」あっさり彼女の口車に乗ってしまった。

楽しい一日を終えて、藤沢駅から小田急に乗り換える。「ピリピリピリ・・・」「プワーッ」当時の小田急は、車掌がドアを締め、後ろで号笛を吹いて発車だ。はっと気が付いたら、藤沢駅に大事な木の枝を忘れてきたことに気付いた。そのことを榛葉、渡辺両君に話していたら、車掌さんが「次の駅で藤沢へ電話してあげるから、忘れた場所を詳しく言ってごらん」と言い、わざわざ『本鵠沼駅』で電話して、次の便で届けてくれるように手配してくれ、「親孝行だね」と励ましてくれた。次の便が着くと、車掌さんが新聞紙に包んだ私にとっては大事な木の枝を持って下りてきてくれた。心から有難いと思った。

「人情紙風船」と言われた当時ですら、人間関係の豊かさは、今より遙かにあったことを思うと、改めて日本はどこまで落ちていくのかと空恐ろしい思いである。

その木の枝は、約二か月の間、母の手によって我が家の床の間に飾られていた。

海　水　浴

我々の楽しかった思いでの一つとして、欠かせぬものの一つに海水浴がある。当時、小学校にはプールなんて気の利いたものはなかったので、高学年になると先生に引率されて鵠沼海岸に海水浴に行ったものだが、これが大変楽しかった。

六月の末になると、例によって裁縫室で先生の説明がある。この時ばかりはいつも恐い白井先生の説明も、柔和に響くから不思議である。説明が終り突然先生の顔が崩れたと思ったら、にやっと笑って、「それから男生徒に注意しておくが、お前たちの褌の間から、変なものをちらちらさせとくんじゃないぞ。みっともない」皆、げらげら笑う。追い掛けるように、「万年筆をくるっと向いたようなやつを、出している者がいるぞ」再びどっと沸く。桜本先生が悪乗りして、「みんな笑ってるけど、ほんとに出していた人がいたんだょ」また笑いが起こる。私は、後にも先にも『万年筆』という表現は、このとき以外は聞いたことがないので、今でも鮮明に覚えている。

ともあれ授業のない楽しさが当時からあったことは、カリキュラムの問題と思われる。「では、みんなで海水浴の歌を楽しく歌いましょう」桜本先生の音頭で歌い始める。当時この歌が始まると、『真夏の入道雲』、『土用波』、『麦藁帽子』、『とんぼ釣り』などが連想ゲームのように浮かんできて、いよいよ夏休みに入るんだという、うきうきした楽しさが込み上げてきたものである。

山下君、石原ノブさん、升谷イトさんなどの助けを借り、一部忘れかけていたこの歌の歌詞を、思い出をたどりながら抜き書きしてみると、改めて当時の友達の表情が、生き生きとよみがえってくる。

海水浴の歌

一、　西に秀峰　みんなみに
　　海は轟（とどろ）の響きかな
　　砥上原頭　夏更けて
　　燦爛の陽は輝きぬ

二、　昇る朝日に　色映えて

岸辺に立ちて　我呼べば

山より高き　大浪は

今しぞ前に　飛沫あぐ

三、　波を蹴りては　波を追い

水に潜りて　水に浮く

横のし抜き手の　早業は

みずちの卵　さながらぞ

最後の『みずちの卵』は坂倉校長が転任されてから、『卵』はおかしいので『手並み』と改定された。因みに『みずち』とは『蛟』と書き、蛇に似た架空の動物で、水中に住んでおり、角と四本の足があって毒気を吐くというものでこれは私が戦時中『蛟龍』という特殊潜航艇の艇長になったとき、初めて知ったものである。さて、いよいよ当日、授業は午前中で終わり待ちに待った出発だ。先生方は、白線の入った黒い海水帽に甚兵衛を引っ掛けただけで、下は海水パンツ、男子は褌または海水パンツにランニングといういでたちで、海岸まで約三十分の道程を、わいわいがやがやとはしゃぎながら歩く。私は白褌にランニングだったが、先生方の甚兵衛姿がとても涼しそうで羨ましかった。

二列縦隊になってローカル色豊かな田舎道を歩く。海岸までの沿道には藁葺屋根の農家が点在し、家と家の間は芋畑、麦畑、桃畑、西瓜畑、野原、林などがあって、草むらにはきりぎりすの鳴き声が、耳慣れた私にも新鮮に聞こえ、ばったは人が近付くとぱらぱらっと畑や野原の方に飛んで逃げる。畑の上にはおんじょ（銀やんま）が区画ごとに「ここは俺の縄張りだ」といわんばかりに、低空を悠々と旋回している。そして雌が近くに飛んでくると迎撃戦闘機のように急上昇してこれをキャッチし、アベックとなって飛び去る。

竹林等の近くでは更に大きな『やぶおんじょ』（鬼やんま）が日陰の路上を悠々とゆきつ戻りつしている。また、けやき、椿、珊瑚樹、松等には、油蝉、みんみん蝉、つくつくぼうし、熊蝉などがせわしげに雌を求めて飛び交っては、オーケストラを奏で、栗の木には黄金虫、かぶとむし、くわがた、あげは蝶などが仲良さそうに体を寄せ合って蜜を吸う光景なども見られた。

海辺が近付くと、今度は松林になり、潮騒が間近に聞こえ心が弾んでくる。引地川河口の鵠沼橋に出て川面を眺めると、無数の『いな』（ぼらの子）が群れをなして泳いでおり洲には赤い鋏を持った『かに』がうさん臭そうに我々を見上げている。さあお待ち兼ね、浜辺に到着だ。鈴木春雄先生指導で、念入りな準備体操をして波打ち際に走る。頭、胸、手足の順に十分濡らしてから波に向かう。沖の方から大きなうねりが次から次に押し寄せてくる。うねりの山は我々の二十米位手前で崩れ始め、空気を巻き込み白波となって我々を襲ってくる。手をつないだ女の子達は、その度に「きゃーきゃー」と大袈裟な悲鳴を上げる。透明なうねりの中には無数の小魚がうねりに弄ばれながら楽しげに泳いでおり、水を透した青空のバックが小魚たちを浮き上がらせている。まるで我々と一緒に海水浴を楽しんでいるかのようだ。手拭いや帽子で掬おうとしてもすばしこくて中々捕まらない。まるで弁慶と牛若丸のようだ。

四十才くらいの小母さんがクロールで我々の前を横切り、立ち上がって「はあはあ」息をつき「だめだわ、もう年だから」と笑いながら、それでも楽しそうにしていた。当時泳げる女性は殆ど横のし泳ぎであったから、この人は都会から来たのであろうか。「よう、おにっくらしんべえ」（鬼ごっこしよう）誰かが言った。「おお、やんべえ、やんべえ」鬼になった者は大変だ。深さが膝より深くなると走れない。無理に走ろうとすれば、足を取られてしまう。泳ぎの達者な者や、潜りのうまい者にはすいすい逃げられていつまでも捕まらない。

突然、「ピリピリピリー・・・」号笛が鳴り響いた。一旦砂浜に上がって甲羅干しの休憩だ。寝そべってた者を浜砂で埋めたり、波打ち際に穴を掘って、やっと捕った小魚を入れて泳がせたり、女の子は濡れた砂で人形を作ったりしている。十名余りの子は砂浜に三角ベースを作って、ゴムボールで野球をやっている。坂倉校長先生が入ってきた。バッターボックスに入って、いきなり「えーいっ」と大声を上げて思い切り手を振ったらこれが場外ホームランだ。「やっぱり大人にゃ、かなわねーや」誰かがつぶやいた。

砂浜にはビーチ・パラソルがちらほら見える。（今のように所狭しとぎっしり立ち並ぶという程ではなかった）だから当時の海水浴場は文字通り善男善女が伸び伸びと集える場であった。女性の海水着は、今のものと比べるとずっとださい物であった。背中もあいておらず、おまけに腰から下は二重になって、ミニスカートがまわりに付いているようであ

った。それでも何の屈託もなく、からっとした楽しさを味わっていた。また、規則も今よりはずっと守られ、遊泳禁止区域で無神経に泳ぐような人は滅多にいなかった。

波打ち際には、蛤、桜貝、塩吹き貝（しょんべん貝ともいったが、しゅっと水を吹き上げる薄紫の細長い貝）や、かに等が無数にいて、自然と人間の調和の世界であった。

日本資本主義のがめつさは、必要以上の自然破壊を押し広げ、当時ふんだんに見られた自然と人間の調和を次々と奪ってしまった。人類が、平和でより豊かな生活を求めて発達させた文明は、皮肉にも自ら作り出した文明で、自らを追い立てるような生活に追い込み無神経に刹那の利潤を追う利権屋だけに貢献するものになってしまった。

唱歌の時間

我々の時代は、今の小学校のように、楽譜など読めなくても、一向にさしつかえなく、音程がさほど狂わずに上手に歌えればよかった。私達の学年は、基本の発声法だけはみっちりやられたように思う。例えば、「ドミソドー」の調子を「アアアー」「イイイイー」のような形で、何度も何度もやらされた。女子の方も、武藤先生が着任されてから、八幡先生と同期生であった為に、何かとコミュニケーションも蜜に成ったようだ。或る時は、隣の女子の教室から「ドレミファソファミレド」の基本発声を「アエイオウオイエ、アエイオウオイエ・・・・」の形で大きな声で繰り返し、その繰り返しの多さに授業中、一人が笑い出すと、つられてみんなが笑い出したこともあった。ある時、休み時間になり校庭でに出ようとしたら、女子の教室は、まだ唱歌の最中で「ツラーラッツツゥターノシイスキー・・・スベリャカラダガ、ホカホカホーテールー・・・」という元気の良い歌声が聞こえてきた。教室の横を通るとき「まだやっているのか、熱心だな」と思いつつ中を覗いてみると、みんな雀の学校よろしく、大きな口をあけて一生懸命歌っていた。歌が大好きなクラスだなと思った。そんなふうだったので、我々の学年は、他の三年に比べて、合唱はズバ抜けて上手だったようだ。八幡先生も武藤先生も当時は、師範出のバリバリの若手先生として使命感に燃えて居られたようで、厳しさも一段と強く、よくぶん撲られたものだ。最も数多く撲られたのは、私と池田三平君だったろう。私は一人の時に撲られることが多かったので、これを読んで、意外に思う人があるかも知れないが、私はこのお蔭で、

兵学校で撲られた時も、それ程苦痛を感じないで済んだ。

閑話休題、小六の時、夏休みに鵠沼の海で納涼演芸大会が催され、男子は合唱、女子は踊り等の出演が決定した。その合唱練習の時である。曲目は、海の生命線、一番は「輝く空に日の光、漲る南太平洋、白波常に紅の、珊瑚の岸を打つ所、連なる島よこれこそは、我等が海の生命線」から始まり、延々と続くのだが、その歌詞の中に「固めの城ぞこれこそは・・・」というくだりになると、加藤徳次君が「片目の白目」とやる。すると隣の吉田敏行君が「くすっ」と吹き出す。彼は余り笑う方ではなかったので、加藤君は、面白がってその小節にくると益々大声を出して「カータメノーシロメ・・」とやる。とうとう先生に聞こえて見事に「ごつん」を食らったが、今となつては、これもなっかしい思い出の一駒である。余談はさておき、この演芸会の結末は、現藤沢市長の母上葉山ふゆ氏によれば、「男子の合唱と女子のダンスがズバ抜けて良かったという評判よ」であった。女子のダンスとは、雨宮さん、田口さん、内田スミエさんの三人であった。当時は軍国主義の時代だったので、このような元気潑剌とした調子のものが受けたのであろう。

読み方の時間（今の国語）

低学年の頃の読み方は、イヌーガ　ニクヲー　クワーエテー　ハシーノウェーヲートオリーカカリーマシタ」というように、随分と間延びをした読み方で、みんな似たような口調で読んだものだが、二年の頃から、山下君だけは、大人っぽい読み方をしていたので、よく代表で読まされていた。三年の頃から文語体の文が入り込んできた。「大日本、大日本、我等国民八千万は・・・」から始まり「乙橘姫」の章は、美文調の詩を読むような快感ががあり、挿絵には、夫の身代りに、船から荒れ狂う大海に身を躍らせる姫の姿が描かれて、憐れを誘っているのが目を引いた。また、何年の時だったか「無言の行」の章では老僧、僧侶たち、小坊主が、修行中に行燈の灯が消えかかると、次々に黙って居られずみんなしゃべってしまうという筋書きの文を交代で読まされた時、関根貞久君が、「坊主、灯芯をかき立ててくれ」という読み方が、その情景にぴったりで、みんなが大笑いしたので、先生も喜んで同じ箇所を三度読ませたことがあった。「軍艦生活の朝」の章では、起床ラッパが鳴る直前の情景描写で、「当直将校の靴音がこつこつと・・・」の場面が印象に残っていたが、私が戦艦大和に乗った時も、その描写がそっくり生きているなと思った

ことを思い出す。「狩勝の展望」は、名文だったようで、朝礼の時、山下君が選ばれ、当時、設備されて間もないマイクの前で読み上げたことがある。その読み方を彼が練習した時、数名の者が「かりかちのてんぼう」を「イタチのデンボ」などとふざけて囃し立てていた。どういうわけか、当時、尻のことをデンボと言い「お猿のデンボはまっかっか」などと言っていた。

ある昼休み

昼弁当は、お湯汲み当番が、小使室の方から、大きな薬罐を二つ持ってきて、アルミの弁当箱の蓋に注いで回った。そして、先生と一緒に「我、人共に・・・・」を呪文のように唱えてから、「いただきまぁーす」と言って食べた。

食後、八幡先生が、古事記を解説しながら読んで下さったことがあった。たしか低学年（二年か三年）の時だった。今にして思えば、当時の我が学年は、随分マセた子がいたようだ。というのは、第一回の日に「イザナギの命が『吾に成り成りて成り余れる所一所あり』と言われると、イザナミの命が『吾に成り成りて成り合わざる所一所あり・・』というくだりを読んだ後の解説で、「イザナギの命は『私は、体がすっかり出来上がりましたが、一ケ所だけ余っている所があります』と言われると、イザナミの命は『私も体がすっかり出来上がりましたが、私の体には、ただ一ケ所だけ足りない所があります」と答えられました。そこでイザナギ命は『それでは、私の余っている所を、あなたの足らない所に埋め合わせて、国を造ろうと思うのですが』と言われると『それがいいですね』とお答えになりました。・・・」私は、このときイザナギの命には、ほっぺたかどこかに「コブ」のようなものがあり、イザナミの命には、窪んだ所があるのかな等と想像していたが、話が終わって校庭に出たら、渡辺君たち数名が「ようよう、聞いたかや、ありゃあ、やんことだんべえ」私は何のことか解らず「なにがよ」と問い返すと、「ちぇっ、わかんねぇのかよ。イザナギの命は男だんべえ。だから、余っているところはよう、ありゃあ、きんたまのことだんべえ。それからよう、足んねえ所ってのはよう、女の・・・・だべえ。だから、余った所を足んねぇ所へ・・・てのはよう、やんことじゃんか」私はカマトトではないが当時ここまで言われても、ピンと来なかった。八幡先生も、とうじ低学年の我々がここまで頭が回るとは、恐らく、考えも及ばれなかったであろう。恐るべき早熟と言えようか。いやいや、おおらかな時代だったと言っておこう。

Ⅲ 鵠沼風物詩

若尾　肇

餅　つ　き

当時の餅つきは、十二月の下旬に各戸回り持ちでリヤカーに臼を積んで運び、農家の庭に臼を据える。数名の村の衆が応援に駆け付けて、ねじり鉢巻で二人または三人で杵を持って臼を囲む。おかみさんたちは、襷がけに手拭を姐さん被りにし、餅米を蒸す人、蒸し上がった餅米を運ぶ人、臼のそばで手返しをする人などに分れて待機する。

さあ、餅つきの始まりだ。蒸し上がった米を臼に入れ、杵でこね始める。「さあいくぞう」小父さんの掛け声と共に振りかぶった杵を勢いよく振り下ろす。初めの中は「ぺったんこ、ぺったんこ」とテンポを遅くして、おかみさんの手返しを楽にしてやる。おかみさんは素早く右手を濡らしては、ついた餅を右手でひっくりかえす。水を付け過ぎると餅が緩んでまずくなるので、べとつかない最小限の水を付けるのが手返しのこつだ。

手返しが慣れてくると、餅を搗くスピードが上る。おかみさんは、器用に杵に合わせてリズミカルに餅を返していく。人によっては「ほい、ほい」とか「はいっ、はあ」とか小父さんの掛け声に合わせて集団作業を楽しくさせている。時々変な半畳も入る。

「よう、おめえ、腰付きわりいぞお、ゆんべ使い過ぎだんべ。おめえのかあちゃん、激しかんべからな」回りがげらげら笑いだす。おかみさんも顔を赤らめて笑っている。

最後の仕上げは三人が、手返しなしで、女共にかっこいいとこ見せようと、「たんたんたん、たんたんたん」と見事な杵捌きを見せて仕上がりとなる。

搗き上がった餅は、新聞紙に米粉をひいた上に載せ、丸くして鏡餅にするものと、四角い板状に引き伸ばし、後で四角い切り餅にするものとに分ける。来た人には、その場で千切って、きなこをまぶしたり、海苔で巻いたり、大根おろしに絡ませて食べさせる。

現代の都会地には見られない、ほのぼのした人間関係がにじんでいた。

お　正　月

昔は、数え年制だったので、日本全国、万民がお正月に同時に年を取った。

大晦日の晩は夜更かしをするので、元日はいつもより起きるのが遅くなる。顔

を洗い神仏にお参りすると、お膳にはお節料理がずらりと並び、お屠蘇用の土瓶と赤い盃が載せられている。お屠蘇を飲んで、お節料理を突っきながらお雑煮を食べて、それぞれ一才ずつ年を取り、「おめでとうございます」になる。

子供にとって楽しみなのは、この後で貰うお年玉である。それでも当時は質素そのもので、五銭とか十銭程度で、五十銭も貰うと天にも昇る心地になったものである。

玄関には三宝が置いてあり、十時過ぎるころには、紋付き袴の村の衆が次々と手拭やら半紙などを持って年賀に来るのだが、毎年手拭を奴さんの形に折って持ってくる人があり、これを楽しみに待っていた。挨拶の口上は皆判で押したように同じである。

「昨年中は、大変お世話になりました。本年もどうぞ相変わりませず、宜しくお願い申し上げます。」「ご丁寧におそれいります」この決まり文句は今でも官庁、会社内や地方では続いていると思うが、村人が一軒一軒回って歩く風習は、東京のベットタウンとなってしまった地方には見られなくなってしまった。

道を歩く若い女性は、日本髪に振袖姿で嬉しそうな明るい顔をしている。ほろ酔い機嫌の小父さんから「よお、よお、滅法きれいになったんじゃんかよお」と冷やかされると、「やーだ、小父さんったらあ」と言いながらも、顔赤らめて嬉しそうに笑う。軍国主義時代でも、今より遥かに庶民感情はおおらかであり、庶民間に心の触れ合いがあった。

農家は松飾り、しめ飾りなどは実に几帳面に飾りつけてあった。貧乏な農村とはいえ、平素の生活は質素そのものにして、年に一度のこういった行事には、家族が潤えるだけの金は張り込んでいたようだ。

稲　荷　講

葉山マタベさんのお屋敷は数千坪はあったろうか、大きな御影石の門を潜ってしばらく行くと玄関になるが、玄関前広場の手前左側に築山があり、山の上にはベンチが置いてあって、幼児には一寸とした公園に感じられた。

築山の手前を左に折れ、山に沿って小道を歩くと、石造りの狐が二匹、台の上に座って稲荷神社の番をしている。そこから約十メートル奥に小さな祠（稲荷神社）があった。周囲は鬱蒼と生い茂った森で薄暗く、子供が一人で行くのは怖い場所であった。

毎月二月一日？ここのお祭りがあり、村の衆の寄り合いの場の一つであった。

この時は、葉山家に村の衆が集まり、お祭りの後、赤飯の炊き出しをして祝う

のだが、我々子供は祭の行事より、その前後の行事の方が楽しみで出掛けたものである。

始まる前には子供達が高学年低学年取り混ぜて、葉山さんのお屋敷に集まってくる。男子は高等科の生徒が中心になって、駆逐水雷をするのが、これまた年中行事であった。「にしっちょ」対「ひがしっちょ」・「なんや」の試合になった時のこと、「にしっちょ」が断然優勢で、「にしっちょ」側の陣地には敵方の「ネンキ」がたくさん捕らえられていた。私は図に乗って、一年上の八木さんに迫った。八木さんは私を挟んで上と下に兄弟があったが、兄の方は戦時中空母「信濃」乗り組みとなって戦死された。その兄の方を追い掛けたのである。

彼は逆らわずに逃げたので、私は逃がさぬとばかりどんどん追い掛けた。しかしこれは彼の巧妙な罠であった。「なんや」の方に七〜八百メートル追い掛けた時。彼は走るのを止めてくるりと振り返った。

私も直ぐに「がっちゃ」の構えに入った。だが、当たりには誰もいない。しまった、と思ったが後の祭である。まんまと彼の罠にかかってしまった。私の体格や力量では、一対一ではとても彼には叶わない。彼は十分それを承知で、私を援軍のいないところまでおびき出したのだった。

彼は右手で、掛かっていく私の両手を払い除け、左手で簡単に私の頭を押さえてしまった。骨折り損のくたびれ儲け、とは正にこのことであった。私はとぼとぼと、疲れた重い足を引き摺って、敵の陣地へ「ネンキ」になりにいった。

ともあれ、町内の子供達が、一所に集まって年長から年少まで一つになって遊ぶ場があったことは、子供達にとっては、誠に幸せであった。

駆逐水雷を終え、三々五々お屋敷内の玉石などに腰を下ろして体を休めていると、祭が始まっているのか、神主さんの祝詞の声がとぎれとぎれに聞こえ、裏の方からは炊き出しに忙しいおかみさんたちの声も聞こえる。

やがて式が終わったのか、参列者はぞろぞろ戻ってきて、炊きだしの仲間に入っていく。

小父さんたちが炊き上った赤飯で野球のボールのような大きなおにぎりを握り、それを何十箇も大盆に載せて肩に担ぎ歩きだす。

すると子供達は待っていましたと小父さんの回りに駆け寄って、「おくれ、おいらにもおくれよう」とねだる。すると小父さんは「ちゃんとやんから、しんぺえすんな、ほらよ、ちゃんともたねーと、おっことすぞ」などと言いながら一つずつ渡してくれる。なんと言ってもおいしかったのは、炊き出しの「煮しめ」である。慣れた農家のおかみさんの味付けは天下一品と思えた。

その後が大人の宴会である。酒肴が出て、田舎芸者が呼ばれる。酔いが回って無礼講になると、浪花節を唸る者、卑猥な話をする者、全く開けっ広げである。小学生が口を押さえながら、「あのスケベじじいよう、ゲーシャのけつをよう、腰巻ごとまくり上げてよう、おらあ、げーらげら笑っちゃたーよ」と言っていた。今だったら教育ママが目をむくであろうが、当時は子供がいようが頓着はなかった。げにおおらかな時代だったといえよう。

凧　揚　げ

一般には、凧揚げは正月が多いようだが、堀川では五月の端午の節句（子供の日）に行われるのが通例であった。

この日は、家々から矢車のからから回る音が聞こえ、布製の長い吹き流しや真鯉、緋鯉の鯉幟が、五月の爽やかな緑の風を口一杯に吸い込んで青空の中を泳いでいた。そして矢車の音をかき消すように、様々な凧の唸りが聞こえていた。

子供達は、主として金ちゃんの店で凧を買っていたようだ。というのは金ちゃんの店が一番種類が多かったからだ。四角い凧の他、やっこ凧、とんび凧、蝉凧などがあったが、やはり角凧が圧倒的に多かった。

凧の絵は、メンコと同様に武者絵がほとんどで、字は稀であった。器用な人は、市販のよりずっと大きな凧を自分の家で作って、好きな絵や字を、描いていた。市販の凧は、一番大きなもので半畳敷き位であった。

毎年町内で大凧を作り（六畳敷以上）、それを上げるのが呼び物であった。凧作りの名人にマゴちゃんという人がいて、この人の姓は葉山であったが、我々は「大西」のマゴちゃんと呼んでいた。彼が作った凧は空中で前後左右に揺れることなく、じっと静止した状態で、凧の尾の先がわずかに右へ左へと揺れるだけで、貫禄があった。

現藤沢市長葉山峻氏が生まれたとき、父親のマタちゃんが、今までに最大の十二畳の大凧を揚げることにした。製作指導者はもちろんマゴちゃんである。太い孟宗竹を丸ごと骨組みにし、間に補強材を入れていく。

骨組みができあがると、水に強い和紙を貼り、「峻」という字が面一杯書かれた。逞しい字になった。全体ができ上がると今度は数十本の糸目を付けに掛かる。この時がマゴちゃんの本領発揮のときだ。凧を立てて数十本の糸目を一定の長さに切り、上から順に一纏めにして小父さんが持つと、マゴちゃんのてきぱきした指図の声が飛ぶ、

「それ、左っかわのイトツペ（糸目）をもうちっと緩めて、真ん中をもっと引っ

張れ。おう、そんじゃあ張りすぎだあ。右っ側は気持ちたるませろ。あ、そんでいい。」

凧が揚ったときの安定は、重心のバランスが取れた本体と、糸目の張り方で決まる。

これらは、科学的な計算をして、割り出すのではないが、マゴちやんの長年の経験による勘がすべて科学的な理に叶っていたようである。凧の最上部には、藤を薄く剥いで、弓の弦のように張った唸りも取り付けられた。（我々はこれを「トウナリ」と呼んでいた）かくしてこの大凧は見事に完成した。

この凧は、マタちゃんに抱かれた、０才の「峻」ちゃんが中央に、マゴちゃん初め当日集まった人々と共に写真に納まった。

いよいよ当日、村の衆は凧の揚がる威容を見んものと、続々と「辻」に詰めかけて、マタちゃんにお祝の言葉を述べていた。

小父さんたちは、凧のそばで風向きを一生懸命観察している。凧の糸目は、もつれないようにきちんと束ねられ、引き綱は輪にして積み上げられている。どうやら南西の風のようだ。小父さんたちは数名で凧を担いで北東の方に運んで寝かせ、引き綱を南西の方に約三十メートルくらい伸ばし、尾はこれと反対方向に二本平行に伸ばされた。引き綱は、なんや寄りの松ノ木に五～六十メートル？位（もっと長かったか？）の所を結び付けた。「さあ、揚げんぞーう、みんな付いてくれ。子供は、あぶねーからどいていろ。」

小父さんたちは二手に分かれて、凧に五～六名、引き綱に十数名付いた。「綱をしっかり握ってろ。いいかあ。凧を起こせーっ。」マゴちゃんが怒鳴った。

凧は糸目を前にぶら下げて、静かに起き始める。凧が斜めよりやや起き上がったとき、一陣の風が吹いて凧が起きるのを助けた。引き綱を握った小父さんは、手に力をいれる。

と見る間に、凧は風を孕んでふわりと空中に浮き上がる。凧の回りの小父さんたちはぱっと一斉に飛び退く。

「やーった、やったあ」子供たちは歓声をあげて手を打った。

「ブルルル・・・・・・」低い底力のある凧の唸りが響き始めた。引き綱を持った小父さんたちは、前の方から手を離して後へ次々と回っていき綱を伸ばす。十二畳の大凧も次第に小さく遠ざかっていく。「峻」と大書した字も小さくなったが、遥か上空にじっと静止して、他の大小様々な凧を睥睨しながら見下ろしている。動いているのは尾の下端が僅かに右に左に振れているだけである。

私が小学校四年生のある凧あげの日、私の横の松ノ木に、凧糸が縛り付けてあり、

糸の先には二畳敷き程の凧が唸りを上げて大空を舞っていた。二年生のコウちゃんとカネオさんが私に付いてきた。松の根本には農家の小父さんが二人寝そべって、だべっていた。

コウちゃんが、その凧の糸を一生懸命引っ張ってみたが、凧はびくともせず、引き寄せることは出来なかった。見ていた小父さんは、「子供にゃあ、ちいっと無理だんべよ」と顔見合わせて笑いがら言った。

私は前、この凧を引っ張ってみて、どうにか一人で引けたので、大人をからかってやろう、という茶目ッ気がむらむらと湧いた。そこで、「二人で引張ってみな。」と言ってみた。二人は力を合わせて引いてみると、何とか引き寄せられた。そこで私は、「二年と二年で四年だから、俺は一人だ」と小父さんに聞こえるように言った。小父さんたちはまんまと引っ掛かって、「よう、二年と二年で四年だから、一人で引けるとよ。分っちゃいねえだな。見ててみな、引けっこねえから」この囁きが聞こえたので、私は得たりと凧糸をぐいと引っ張った。「あら、引いちゃつたよ、ハジメちゃん、つええな」私は、内心の得意を隠して、照れ臭そうにっこりした。それにしても純朴な大人だった。

一般市販の凧の唸りは、帯状のゴム製なので、甲高い「ビュルルルーン」という音であるが、藤製の「トウナリ」は自家製の凧に多く、低音で重みがあった。これらの音が入り乱れて、賑やかに堀川の空を震わせ、この音を聞くと、五月になったとの実感を深めたものである。

青柳さんという、髪の毛をぼさぼさにし、着流しに兵児帯を締めた絵書きさんがいた。体格ははやせてひょろひょろとした感じで目だけが大きく、ガンジーのような風貌の人であったが、とても温厚な人柄であった。

彼は、元は子爵の家柄だったそうだが、酒が好きで上流社会の窮屈な生活を嫌い、自ら勘当されて、貧乏画家の暮らしに甘んじているんだ、と村人は言っていた。ある時、彼は草むらに寝転がって、一心に空を見上げていたので、私は声をかけてみた。

「小父さん、何を見ているんですか。」

「ああ、ワカオさん（彼は私を、ハジメちゃんとは呼なかった）素晴らしいじやありませんか。真っ青な大空の中に、いろんな凧が、威勢よく飛び交っている姿は！揺れているのもあるし、ぐるぐる回ってるのもあるし、じっとしてるのもある。特にあの一番高いとこにある凧は、威厳がありますよね。この感動を絵にしたいんですよ。」

当時の私は、当たり前なことを何でそんなに感動するのかな、と不思議に思っ

たが、人間が物質文明に毒され、心を失うような世の中になって初めてこの人の気持が痛いほど分かるような気がする。

引　地　川

引地川が現在のような川に改修された後、暫くは、蛇行していた以前の川の名残が所々に残っていた。それが砂山の下では三日月形になって、水辺には葦が生え、繁殖したハゼや泥鰌、源五郎やあめんぼう、水澄ましなどがかなりたくさん泳いでおり、水草や藻などもあった。水は砂の間から湧き出るだけであったから、以前の川のように汚れておらず、浄化されたように透き通って、一番深いところで二メートル以上あったと思うが、水族館を上から見るように、川底が見えていた。小学校五年のある日曜日、私が案内して、三留、藤井、池田の三君と八幡先生、武藤先生の五人で、そこに釣りに行ったことがあった。当時は、まだここは人里離れた場所という感じで、私にとっては、先生を秘密の場所へ案内するという得意さがあった。

当時の釣り竿といえば、今のようなものでなく、女竹を切っただけのものだった。

よく晴れた日であったので、輝く太陽、砂山を囲む松の緑、青空をくっきりと映しだしている水面、水底を這うように泳いでいるだぼはぜ、水草に体を休めている川えび等が、何か別世界に来たような新鮮な印象を与えてくれる。

この時は、どういう風の吹き回しか、私の針にはよく食い付いて、私が十匹釣っても、他の人は未だ一匹も釣れなかった。私はすっかり得意になって、「釣り方には、コツがある。」などと調子に乗っていた。

その翌日学校で武藤先生から、「若尾君、君は釣がうまいね。今度教えてくれよ。」と言われて、内心得意になっていたら、八幡先生から「あまり良い気になるな」と目配せをされた。

それから二年後、山下君と境川の河口へはぜ釣りに行ったところ、今度はまるで逆の立場になり、彼が十匹釣っても、私は何も釣れず惨めな思いをした。

太　平　台

それから間もなく、砂山を含む広大な松林が、地主の平沼さんの手によって開発され、太平台の開所式が行われた。

渡辺君から、「太平台で、何か式があんからよう、行ってみんべえよ、」と誘われ、榛場君らと見に行った。

太平橋を渡ると、直ぐ右手に祭の時などに見られる芝居小屋風の、仮小屋があり、両側に紅白の幔幕が張られていた。かなり大勢の人が集まっていた。

やがてモーニングにシルクハットを付け、鼻髭を蓄えた、時の町長大野守衛氏が重々しい足取りで表れたが、当時の我々には随分偉い人に見えた。

そのうちに、式典の時間になった。町長の祝辞が始まる。町長は中央に出ておもむろに奉書を広げ、軽く咳払いをして、奉書を読み始めるが、途中、つかえるとまた咳払いをする。今から思うと随分もったいぶって、威厳を保とうとしていたように思えるが、当時は偉い人のお言葉、という受け止め方をされていた。その他の来賓の祝辞が終わると、来会者は紅白の落雁のようなお引き物をもらい、出し物が始まる。

先ず万歳、と言っても当節の万歳よりクラシックなもので、「なったあ、なったあ、じゃになった、こんやの聟殿じゃになった」「何のじゃになられた」「大蛇になられた」ここで「ボケ」が扇子で頭を叩かれる、という祝辞の口上を取った物で、今の人が見たらおかしくも何ともないと思うが、娯楽の無い当時は、こんな程度で結構楽しんでいた。

覚えているものをもう一つ上げると、松の模様の付いた扇子を持った人が、その扇子を広げ、扇子の数を増やしながら、様々な松の形を、体を幹にして作っていくというもので皆感心して見ていた。

太平台は宅造の走りだったが、現在、現地は家がひしめきあう環境と化している。

活動写真

映画を当時は活動写真といっていたが、動く写真であるから映画と言うより活動写真と言った方が、合理的のように思われる。

当時は、殆ど無声映画であったので説明役を必要とし、この人のことを「弁士」（または活弁）と呼んだ。

活動写真館は、本通に「藤沢劇場」、藤沢銀座には、「オデオン座」があった。板敷の観客席に、持参の座蒲団（貸し座蒲団もあった）を敷いて見物するのである。舞台の方を見ると黒く縁どった真四角の白布をスクリーンにして正面に据えてある（勿論、銀幕などはない。）左手の隅に机と椅子があって、赤くほの暗い行燈のような明かりが付いていてそれが弁士の席になっている。また右側には、バイオリン、トランペット、サックス、ドラムなどを持つた樂隊が待機している。

当時の藤沢は、今と違い場末の田舎町、といった雰囲気であった。

映写機は、初めの頃は手回し式であったから、映写開始と同時に、映写技師は手で機械を回し始める。映写機の回転に連動してプロペラが回りフィルムを冷すようになっていたので、技師は回転を始めると、手を休めずに機械を等速で回し続けねばならなかった。当時のフイルムは、セルロイド製であったから、映写電球の熱で発火しやすく、一旦引火すると爆発的に燃えて、大火災になることがしばしばあったからである。

始めて観た活動写真は、「オデオン座」で五才の頃であったか、「撃滅」という活動写真であった。「動く写真が見られる！」「動く写真ってどんなんだろう？」私は好奇心に胸踊らせていた。

拍子木が鳴った。いよいよ始まりである。前座は「一太郎やーい」の一人芝居で幕を開けた。大日本帝国海軍と横に書かれた水兵帽を被り、セーラ服姿の一太郎が出征の場面だ。彼のボートは岸壁を離れて行く。

彼が帽子をくるりと回すと、後の半分にあった老婆の髷が前に来て、いつの間にか老婆に変身している。彼女は息急き切って岸壁に駆け付けるが、ボートは既に出た後である。

そこで彼女はボートに向かって大声で叫ぶ「一太郎やーい、お国の為にしっかり尽くしてくんだぞーい、分かったかーあ、分かったら鉄砲を上げろー」

ここで老婆は一太郎に早変わりして、薄板で作った小船の中にしゃがみ、オールを漕ぐ仕草をし、客席の方を見ながら持っていた鉄砲を右手で高く差し上げる。客席からは一斉に拍手の渦が巻き起こる。

さあいよいよ「撃滅」が始まる。観客は固唾を呑んでスクリーンを凝視する。弁士のさびのある声色が、静まり返った観客の耳に、厳かに伝わる。「時は明治三十八年五月二十七日、世界最強を誇るロシヤのバルチック艦隊は、これを迎え撃つ東郷平八郎大将率いる帝国海軍連合艦隊を、一捻りせんものと、威風堂々ウラジオストックに向け帝国に接近しつつあるのであります・・・・敵艦隊は、対馬海峡に来るか、津軽海峡を通るか、はたまた宗谷海峡に出るか、議論沸騰の中で、沈着勇断の東郷司令長官は、「敵艦隊は必ず対馬海峡を通ると決断したのでありました。」

こんな説明中、司令官室の海図を囲んで参謀たちが、様々に思案している様が映しだされる。そのうち、敵艦発見の電報が入り、司令室は俄かに緊張が高まる。ここでまた、弁士の説明が入る。「秋山真之参謀は、直ちに大本営にかの有名なる『敵艦見ゆ、との警報に接し、連合艦隊は直ちにこれを迎撃、撃沈せんとす。本日天気晴朗なれども、波高し。』との電文を打ったのでありました。」

楽隊は直ちに軍艦マーチを奏で始める。ここでいよいよ日本海海戦の場面になる。敵艦隊の主砲は、早くも砲門を開き、我が艦隊の前面に次々と大水柱を上げる。

我が軍は、「撃ち方初め」の号令が下るを今や遅しと待っているが、司令長官は中々命令を出さず、将兵に焦りの色が見えてくる。艦隊との距離が六千メートルになった。東郷大将の右手が上がった。いよいよ、「撃ち方初め」である。当時は軍艦の有効射程は六千メートルだったので、それより遠い距離で撃っても砲弾を無駄にするだけなので、それまでじっと辛抱していたのだという。

将兵は勇躍して一斉に砲門を開く。敵艦がこちらに腹を見せるように正面に現れると、こちらの主砲の弾丸が、そのどてっぱらに命中する。敵艦は真っ二つに折れるように沈んでいく。すると弁士の声も一段と高まる。「忠勇無双なる我が帝国海軍将兵は、雨霰と降りくるロシヤ艦隊の砲弾をものともせず、傲慢なる露助め思い知れとばかり、必殺の砲弾を次々に敵艦に浴びせていくのでありました。然し、敵もさるもの、ひっかくもの、下手な鉄砲数打ちゃ当たるの言葉どおり、盲撃ちしてくる敵弾の中にも、我が艦に命中するものも出始めました。」

ここで、司令塔前の甲板で双眼鏡を片手にした東郷大将と（彼は司令塔の中には居なかった）、忙しそうに動き回る参謀たちが映される。大将は時々双眼鏡を目に当てて、戦況をじっと見ている。突然、敵の砲弾が司令塔近くでさく裂し、辺りたり一面砲煙に包まれた。

参謀たちは身を伏せたり、体をのけぞらせたりしたが、東郷大将だけは平然と身じろぎもしない。演出効果満点である。

楽隊の演奏が、「勇敢なる水兵」に変わると、次は砲台付近の光景だ。服はびりびりに裂け、血みどろの水兵が歯を食いしばって砲弾を込め、敵艦に狙いを付けて引き金を引く。みるみる砲煙が水兵を包む。次の瞬間、こちらに腹を向けている敵の軍艦が、波を蹴立てて進んでいる場面となる。数秒後敵艦のど真中に命中、再び敵艦は真っ二つに割れて沈没していき、嵐のような拍手が起こる。

どういう訳か、我が方の砲弾はいつも敵艦の中央に命中し、敵艦は折れるように沈んでいく。今だったら非現実的な演出を笑うだろうが、情報不足の当時は、こんなものでも観客は結構堪能して帰ったものだ。

紙　芝　居

映画がオールトーキーとなって、弁士が失業状態になり始めると多くの弁士は、紙芝居屋に転向したが、紙芝居は田舎の子供達の楽しみの一つであった。

カツチ、カッチ、カチ、カチ、カチカチ・拍子木の音が聞こえると、子供達は我先にと紙芝居屋の小父さんが引いてきた自転車の所に集まる。子供が集まると小父さんは飴を売り始める。一箇一銭の飴をしゃぶって見物する訳けだが、一か所の売上げは、十五～三十銭、多い時で五十銭位であったようだ。

それぞれテリトリーが決まっていて、堀川地区は中山、石上・新田地区は小島という弁士の縄張りになっていたが、生徒どうしも「中山はうめえぞ」「いやあ、小島のほうがうめえよ」などと自慢しあっていた。

人気のあった出し物は何と言っても黄金バツトであったが、漫画的なガムちゃんというのも人気があった。花沢町の山口清君が「小島はサービスしてくれんから良いんだ。ガムちゃんの時なんかよう、屁えひってよう、アー、クーチャイ、クーチャイ、なんて言ってよう、あはははは・・・・」と変な威張り方をしていた。

私の知る範囲では、中山の方が声色が上手であったが、愛想が悪く、小島の方がサービス精神があったようだ。ある時、中山に集まった子供達が、合計五銭しか飴を買なかったら、「あと十銭買ってくれなきゃ、紙芝居はやれない」と言って、買手を待ったが誰も買わなかったので、やらずに行ってしまった。誰か負け惜しみのように「あんな奴、行っちめえ、行っちめえ」とぼやいていた。

鵠沼風物詩

（素朴な遊び）

若　尾　　肇

木　登　り

昭和一桁時代は、子供にとって正に遊び場天国といえた。

野原、森、林、砂山、小川等、遊び場には事欠かなかった。その当時は、それが当たり前で、特に有難いとも思わなかった。

だが、現今のように大人のエゴで次々に自然破壊が繰り返され、子供達の遊び場が奪われて、伸び伸び遊べない時代になると、失ってしまったものがいかに大きかったかが、改めて実感される。

農家は殆どが藁葺きの屋根で、東側には農作業（麦打ちや稲こき等）の出来る広い庭があり、周囲にはケヤキ、椿、珊瑚樹、しゅろ、椎の木、もちの木、ヤツデ、楓、松ノ木等が無数にあり、中には子供が二、三人並んで腰掛けられるような大きな猿の腰掛けを持った大木も散見された。そこで、我々の楽しい遊びの一つに木登りがあった。

猿やターザンのように木から木に飛び移ったり、海が見えるところまで上って得意になったりしていた。

私の家には、庭に大きな青桐の大木があって、渡辺、榛葉、三留、原田、山下等の諸君は、良く我が家に遊びに来たものだったが、その遊びの一つにこの木登りがあった。

ある日、渡辺、榛葉の両君が来たとき、私は例によってこの青桐に登り、どんどん上に上がっていった。梢近くまでいって、「おーい、海が見えるぞーっ」と怒鳴った。葉山さんの木々梢越しに、僅かながら光る海が見えるのだ。渡辺君が「木を揺さぶってみな」と言ったので、私は踏ん張った足でゆさゆさと木を揺さぶった。下にいた二人は可笑しそうに笑ったので、私は得意になって、猿のように体ごと木を揺すった。すると、二人はますます可笑しがり、「もっと揺すってみな」と催促する。私はますます得意になって、大人が見たら木が折れて落ちるのではないかと思えるほど大振りすると、下の二人はますます涙を流さんばかりに転げ回って笑った。

木から降りて暫くの後、両君は互いに顔を見合わせ、にやにやしながら「やっぱり言つちやうべか」と言つてから「よう、俺たちなんで笑ってたか知ってんか？」私はきょとんとして「え？・・何が？」渡辺君が「おめえが木を揺するたんびにようキャハハハ・・おめえのよう、サルマタの間からようアハハハ・・チンボ

がよう、ギャーハハハハ・・ぶらーん、ぶらんようクックッ・・右だあ左だあ揺れてんのがよう、丸みえだったじやんかアーハハハ、アーハハハ・・」私は目のやり場に困って下を向いた。脇の下からは汗がとめどなく流れた。

涼　し　場（すずしば）

農家にふんだんにあったのは、荒縄と丸太と板と梯子である。田中さんの東南の角には枝の広がった大きな椿の木があった。

近所の子供達が集って、田中さんの物置から丸太、板、荒縄、梯子、筵等を引っ張りだし、椿の木の二メートル位のところに梯子を掛け、丸太を木に井桁のように荒縄で縛り付けて板を渡し、これも丸太に縛り付ける。

次に腰位の高さに荒縄を張り巡らせ、筵を二枚折りにしてこれに掛けて囲いにする。

見ていた佐次郎さん（田中家の主人）が、「よお、落ちんじゃねえぞ、気い付けろ」と言っただけで引っ込んだ。

こわごわ梯子を伝わって上がってみると、油蝉のかしましい鳴き声も、ひんやりとした涼しさで快く響く。女の子が蒸した金時芋をざるに入れ、菜切包丁と黒ずんだまな板を持って上がってきて、さいの目に切ってくれた。

チビ共は「おこじょだ、おこじょだ（おやつのこと）」と言って喜んだ。近くでつくつくぼうしが鳴きだした。熊蝉の声が松五郎さんの家の方から潮騒のように聞こえてくる。覆い被さるような高い松の梢越しに、真夏の入道雲が見えていた。（昭和三年頃）

お　ん　じ　ょ　け

どういうわけか鵠沼では銀ヤンマのことを「おんじょ」と言っていた。

トンボ類の中で、塩からトンボ、麦藁トンボ、赤トンボ等は掃いて捨てる程いたので、幼稚園児でも簡単に捕まえることができ、むしろ興味の対象外であった。

小川や池の方には「お羽黒トンボ」（胴が細長く、羽が真黒い）や「とうすみトンボ」（糸トンボ）と呼ぶ小さく可愛いいトンボや、羽の付け根が茶色で、胴が比較的大きくずんぐりし、色が深紅の特種な赤トンボ、形は赤トンボだが、胴体が黒と黄色のまだらなトンボ、木立の深い道に行くと、「藪おんじょ」（鬼ヤンマ）が、日の当たらぬ小道を、大きな図体を持て余すかのように悠々と行きつ戻りつしている等、トンボの種類は多かった。

今でも思い出すのは、夕焼け富士を望む葉山さんの西側のコンクリート塀に、

赤トンボが西日を浴びてびっしりと鈴なりに羽を休めていた。

そんな中で、我々子供達に一層風格を備えた印象を与えていたのが「おんじょ」であった。普通のトンボより二回り程大きく、真夏のかんかん照りの畑の上を、一定のテリトリーを守って悠々と飛んでいた。麦や野菜の間に身を潜め、頭上に飛んでくるのを根気よく待つ。頭上に来たとき「えいっ」とばかり網をかぶせようとするが、低学年の頃はなかなか捕まらず逃げられることが多かった。

畑の上を飛んでいる「おんじょ」は雄で、腹は青色、尾は濃い茶色であった。雌の「おんじょ」は腹が黄色っぽい緑色で、中には薄茶の紋様の付いたものもあり、尾はおおむね赤みを帯びた茶色で、雄より太く柔らかみがあった。

この雌が、雄の上空に飛んでくると、雄は迎撃戦闘機のように急上昇して、雌を捕まえかしゃかしゃともつれてから、雄の尾で雌の頭をしっかりくわえ、連なって飛び去る。

我々はこれを「つるみ」と呼んでいたが、この「つるみ」は、水辺の茂みに羽を休めることが多く、雌は尾を水に漬けて卵を産んでいた。

そこで我々が「おんじょ」を取るには、雌を利用するのが一番だった。用水池等の草むらに隠れて「つるみ」の来るのを待つ。

やがてどこからともなく「つるみ」が舞い降りてくると、「しーっ」と口に指を当てて息をひそめる。「つるみ」は水面をゆっくり飛び回り、羽を休める場所を探す。やがて水面に垂れ下がった草に止まると、雌は尾の先を水に漬けて産卵を始める。

この時、そーっと「つるみ」に近付き胸をときめかせながらぱっと網を掛ける。うまく捕まえると、小踊りしながら雄は虫篭へ、雌は、長さ一米位の竹の先へ、適当な長さをゆわえた木綿糸に胴体を縛り、意気揚々と畑に向かう。「おんじょ」の飛んでいる畑に着くと体を屈め「おんじょけーや、おんじょけ」と言いながら、頭上で、雌をつないだ竹の棒を振り回す。すると、雄は矢のように飛んできて雌を捕まえ、「かしや、かしや」と音を立てながら地面に落ちるのを、すかさず捕まえるという寸法であった。「おんじょけ」とは「おんじょ来い」の方言であろう。

「おんじょ」については、奇妙なふざけ方があった。子供の欲しがりそうな玩具や文房具を持っている者が、それを頭の上にかざして「これを誰かに、たからんじょ（上げようか）」というと、回りの者は必ず、「おんじょ（ちょうだい）」と答える。すると「おんじょの首をもっといで。（持って来い）」と答えてがっかりさせる。

不思議なことに、貰えないと分かっていても誰もが「おんじょ」と答えていた。

また夏は「おんじょ」がたくさんいるので、本当に持って来るかもしれない時は、「おんじょの首を、百もっといで」と難題を吹っ掛けて逃げるようにしていた。

「がしゃ」捕り

当時の鵠沼は「こおろぎ」「松虫」「鈴虫」「くつわ虫」「きりぎりす」「バッタ」「イナゴ」「赤ロ」等の虫の宝庫であり、秋の夜長は、これらの虫が奏でるオーケストラが我々の耳を楽しませてくれたものだ。我々は「くつわ虫」のことを「がしゃ」と呼んでいた。鳴き方を虫の名にしたのだろう。

「ハジーメさん」夕食後、独特の抑揚で、田中のミイちゃん（田中実）が誘いに来る。「がしゃ捕りいくべえ」昼の間にしてあった約束だ。手には西瓜提灯を持っている。これは西瓜の前面に四角い窓を開け、中をくりぬいてローソクを立てたものだ。

私は虫籠（「がしゃかんご」と呼んだ）を持って彼の後に付いた。当時は、街灯などというしゃれたものはなく、月明りと、ぼーっと周囲数尺を照らす提灯の明かりだけである。

葉山さんの正門を右に見て少し行くと辻に出る。ここから南はずっと農道で、東側は畑、西側は畑と野原があり、境には松ノ木がまばらに植えてある程度だ。道に沿って東側には溝とも小川ともつかぬ農業用水路があり、道との間には雑草や潅木がこんもりと生い茂っていて、虫たちの絶好の住家となっていた。辻から「なんや」に至る数百メートルは家が一軒もなく、虫達の演奏会場になっていて、賑やかなことこの上ない。

ミイちゃんが私を手招きして提灯の明かっている所をそっと指差した。茂みの奥に「がしゃ」が一匹背中の羽をこすり合わせて盛んに鳴いている。ミイちゃんが潅木の透き間からそーっと手を延ばした。手が枝に触れて、「かさっ」と音がした。「がしゃ」は瞬間鳴くのを止めて、ぴょんと茂みの奥に逃げた。「きしぇ（ちぇつ）ハジメさん、動いちゃ駄目じゃんかよう」ミイちゃんは、息を殺してじっとしていた私のせいにした。なかなかすばしこいので、捕れたのはたった三匹であった。

ミイちゃんは、虫籠の中にハコベのような草を入れ、流れの水を口に含んでぷーっと霧にして吹き付けた。「こうやってやんとよう虫が喜ぶべ」

突然ミイちゃんが「あっ、人魂（ひとだま）」と南の方を指差した。三百メー

トルほど先に「なんや」の方と引地川の方に行く分かれ道があり、道路沿いに松が一列に植えてある。「えっ、どこよ」「ほれあそこの松んとこよ」成程、赤い、薄い火の塊のようなものが松の向う側を、右へ移動して行く。
「川の方へ、水を飲みに行くだべ。んだけどよう、こっちに気がついたらどうしんべえ。追っかけてくんかもしんねえぞ。」途端に二人の間に、言い知れぬ恐怖感が走った。「逃げんべえ、逃げんべえ。」私はミイちゃんの袂を引っ張り二人は後をも見ずに一目散に駆けだした。家に着いてほっとしたが胸の動悸は暫く収まらなかった。これが本当に「ひとだま」だったか定かではない。

武　士（さむらい）蜘　蛛

当時、木の根本、石垣のすそ、家の土台等に、直径五ミリから一センチ位、長さ十センチ位の袋状の蜘蛛の巣が無数に見られた。

半分位は土中に埋まっていて、指でつまんでそっと引っ張りあげると、千切れることもあったが、うまく取れると、下が長靴下のようになっていて、中に紫がかった茶色い胴体のずんぐりした蜘蛛が入っていた。

この蜘蛛は、頭に釣針のような鋭い二本の爪を持っており、これで外敵と戦ったり、獲物を捕まえたりするのだが、さむらい蜘蛛と呼んだのは、この蜘蛛を掴むと二本の爪（角？）を振り立ててもがく。「サームレ、サムレ、腹切ってしーめ（死ね）」と言いながら体を折り曲げると、鋭い爪を腹にぶすりと突き刺す。するとはち切れそうな腹が破れて内臓が飛びだし、腹が見る見るしぼんでいく。これが、武士の切腹と似たイメージがあったのでさむらい蜘蛛といったのであろう。

また、数匹を菓子の空箱等に入れると、縁に沿って歩くので、尻を突ついて勢いよく走らせると、蜘蛛同士正面衝突して、爪を振り立て壮絶な喧嘩をし、お互いの体が傷ついて汁がにじみ出る。これも、さむらいのチャンバラを思わせるものがあった。

袋に入っている腹の太いのは雌であり、雄は雌より黒っぽく、足が長い割りに胴体はずっと小さくつやがあったが、どこに住んでいたのか今もっ分からない。ごく稀に雌と同じ袋に入っていることがあったが、これは平安時代の「通い婚」か「夜這い」を思わせる。

現在の鵠沼を訪れるとき、昔の面影は全くなく、人間こそ自然の生態系を破壊する天敵だ、との実感を深めるのみである。

宝　探　し

これは単純な遊びであったが、貧乏時代にはこんな遊びでも結構楽しんだものである。

農家の庭または道路の一区画を決めて、その中に短い鉛筆とか消しゴムとかボタンなどを隠し、相手チームの代表者に一定時間探させるのである。（当時は舗装などなく両側は雑然とした木立であったので、潅木の中に隠すと非常に見付け難かった。）

探す人がそれに近かずくと「アツイーヨ、アツイ」と囃し立て、離れた所だと「サムイーヨ、サムイ」と言い、まるで見当外れのところだと「おー、ひやっけえや、うーんとひやっけえ（冷たい）」と教えてやる。こうして探し当てた人の多い方が勝ちであった。

板橋の勇さんがいた時、彼はねんねこ半纏で、一才の弟よっちゃんをおんぶしていた。

当時、手拭を姉さん被りにして、弟や妹をおんぶして遊ぶ光景は普通であった。遊んでいる最中、ねんねこ半纏の中からバナナのような糞が落ちた。裸に着物を着せただけだったのだ。勇さんは回りを気にして「ちきしょう」と言いながら、思い切りよっちゃんの尻をつねったので、よっちゃんは「ウエーン」となきだしたが、何とも気の毒であった。

栗　拾　い

現在は大型宅造　により西鎌倉という住宅地になり、昔の面影は全く残っていないが、川名山という雑木の山があり、人一人が通れるような山径を、落ち葉を踏み締めて歩くのは子供達の楽しみの一つでもあった。

私も、山下、原田、三留などの諸君とよく登ったものである。先導者はその地理に詳しい山下君であった。

石上から、境川を渡ってふもとに着くと、いよいよ山道にかかる。小道の両側には、種々な雑木、潅木、野草が我々を歓迎してくれる。覚えている範囲でも、山桜、くぬぎ、紅葉、藤、青木、八手、だるま、栗等の間に、やぶこうじ、蛇いちご、木いちご、野ぼけ、蔓梅もどき、山あじさい、がくあじさい、山吹、ちょうちんばな等々数え切れないが、今から考えると、自然との共存生活が、いかに素晴らしいものであったかが、自然が失われた今日になって改めて痛感される。

奥の方に入っていくと、薄気味の悪い池があった。岸辺には雑草が水面を覆うように負い被さっており、青大将が一匹こちらに向かって水面を這うように泳い

できた。長さは一メートルくらいあったろうか、岸に着くと鎌首をもたげて、どこから上陸しようかと場所を探しているふうに見えたが、不意に「ぐわー」という声がした。

はっとして声の主を見ると、一匹の大きな蟇蛙であった。彼は青大将をにらみつけて、「寄らば噛むぞ」と言わんばかりに居丈高になっている。蛇はといえば、これに恐れを成したか、「お前とは関係ないよ」というふうを装って、暫くあちこち探す素振りを見せていたが、やがていずこともなく立ち去っていった。　私は、蛙が蛇に呑まれるのは何度も見たが、蛇が蛙に追い払われるのを見たのは、後にも先にもこのときだけである。

私たちは竹の棒を杖代わりに、栗の木を探した。「こっちへ来いよう」山下君が叫んだ。そこには自生の栗の木が数本立ち並び、地面には、茶色くなった栗のいがが数個転がっていた。上を見ると梢越しに、抜けるような青空がちらほら見え、枝には薄青色の栗の実が何個かついている。我々は低い木の枝は折り、上の方にある実は、木に登って竹の棒で叩き落した。

「こうやって実を取るんだ」山下君がそう言って、靴で栗のいがを踏ん付け、竹の棒の先をいがに当て、棒に体重を掛けるようにしていがを剥き始めた。私達もやってみると面白いように剥ける。中から出てくる栗の実は、薄茶色のものや黒っぽいものや色とりどりであったが、野生の栗を取っている楽しさは、今の都会の子には味わえないであろう。

「さあ、これだけ取れば十分だ。遅くならない中に帰ろうや」誰ともなく言った。

我々は、実の付いた枝を両手にもってわいわいはしゃぎながら、帰り始めた。突然、「こらあっ」下の方から大声が聞こえた。

はっとして下の方を見ると、木の枝越しに畑の中に仁王立ちになった青年が、こちらに向かって怒鳴っている。

三留君がさっと顔色を変えたかと思うと、栗の枝を放り出して一目散に逃げ始めた。我々もこれに続いて逃げだしたが、私だけは両手に枝をしっかり握り締めたまま逃げた。

どのくらい逃げただろうか、

「もう大丈夫だよ」と山下君が言ったので、皆立ち止まり、息を弾ませていた。栗の枝を後生大事に握っていたのは私だけであった。だが枝には実が一つも付いていなかった。走っている最中、全部落ちてしまったのだ。

我々は境川の橋を渡り、藤沢駅の南口に向かった。南口には江ノ電と小田急の駅があって、今とは全く様相を異にしていた。川寄りは土地が低く葦が生い茂り、

大雨の後は川が氾濫して湖のようになったものだ。葦の間から羽音を立てて飛び立ったのは鴨だったのであろうか。現在はここもビル街である。

そ　の　他

前に紹介した駆逐水雷や鞠つきは省略。

女子のお手玉の紹介はしたか、その中で、下にまとめて置いてあるお手玉を「おじやーむしや」と言いながら、両手ですくって上にほうり上げ、次から「おふーたや」と言って片手の巧みな操作でお手玉を操っていくのであるが、初めの「おじやーむしや」がどういう語源から来たのか今もって分からない。

ラムネの玉は、今のゲートボールとゴルフの合いの子のような遊びがあった。地面のあちこちに蟻地獄のような小さな穴を掘って、親指と人差し指の先で玉を挟み、小指を地面につけて玉をはじき飛ばす。他人の玉が近くにあると、それを遠くにはね飛ばしてから、穴に入れて次の穴に向い、早く決勝の穴に入れた者が勝ちという仕組であった。

メンコは私たちが使ったものは専ら丸いメンコであり、源義経、八幡太郎義家、曽我兄弟、平重盛、那須与一等の武者絵が多く、尾上菊五郎、尾上松之助、河辺五郎、阪東妻三郎、林長二郎等の役者が扮したものが人気があったようだ。また伊藤博文、東郷平八郎、乃木希典、大山巌、板垣退助などもあり、希には八百屋お七のようなものもあった。

竹鉄砲は、珊瑚樹等の実を玉にしたり、塵紙を口に入れてもぐもぐ噛み、それを玉にするものと、水鉄砲の三通りあったが、割箸を使い、輪ゴムを玉にして打ち合うゴム鉄砲などもいい遊び道具であった。

独楽は、鉄独楽は危ないからと禁止され、専ら「ほうの木」で作った赤、青、白の同心円の模様の付いた木の独楽に、柿渋やあけびの実を表面に塗りたくり、渋い色にして貫禄を付け、相手の回っている独楽に叩き付けて心棒で表面を凹ませて喜んだりした。

他にも素朴そのものといった種々の遊びがあったが、ハイテクを使って一人遊びの出来るゲームとは一味違う人間関係が、これらの遊びを通して持てたと思う。

終わり。

Ⅳ　堀川の思い出

神明様のお祭り

夕靄が堀川をすっぽりと包んだ。クマ店の近くの四叉にある火の見櫓がシルエットのように星空に浮かんでいる。嶌久さんの並びの空き地に数個の裸電球が鈍く集まった人々を照らし出している。集まっている人々はエキさんこと浅場栄吉さんをはじめとする町内の小父さんたちと若者頭（通称ワケーモンガシラ）と呼ばれる青年たちが、小学生に夏祭りの太鼓の叩き方を仕込んでいこうというのである。練習用の器具は、丸太に荒縄をぐるぐる巻きにしたものを、太鼓代わりにして、二本の撥代りの棒で叩くのである。

腕組みをした小父さんが、ベテランよろしく、子供達に声をかける。「それじゃテーコは鳴んねぇよ。撥のもっと根っ子を持つだ。ちょっと貸してみな」撥を受け取り「よく見てんだぞいいか、打ち込みはよう、トロントン、トントロだ。それからよう、トロン、トントントン・トントントンと六つ叩いたらよう、トコトン、トロックトントロとやってなチキリンチャン、チャンチャン　テケテン　テケテン　テレックテン　テレスッテン　テレスケテンテレそいからトン　スコトントントン　トロックッ　トロヒトツクツクツとなってな、これをずーつと繰り返していくだあな。それからよう、笛がオッヒャラヒャラヒャラ　ピーヒャラヒャラヒャラーオとなったらよう、次はヒャーオヒャーオヒャーラヒャラ　ピーヒャラヒャラ　ヒャーラヒャラとなんからようテーコは、それに合わせてよう・・・」子供たちは、早く一人前になろうと、一生懸命習っている。学校の勉強よりは、余程熱心である。

「よみや」と称する祭りの前夜に山車を置く当番の家では、集まる人たちへの接待やら何やらでたいへんである。堀川の山車の人形は仁徳天皇、高殿から民家のかまどの煙を小手にをかざして見下ろしている姿で、二米以上と思われる人形が、よみやに集まった人々を静かに見詰めて居られるという感じだった。この人形は、各部落で異なり、神武天皇あ

り、日本武尊あり、浦島太郎あり、それぞれの部落が趣向をこらしたご自慢のものであった。「よみや」では、浅場ノブさんの家と渡辺千枝子さんの家が当番の時のことを覚えているが、ノブさんの家の「よみや」の時、森繁久弥のやっていた「屋根の上のバイリオン弾き」に似たムードで、実に巧みに笛を吹いている小父さんがいた。後でノブさんの父上だったと聞いたが、その時は「うまいなあ」と感心しながら聞き惚れていたが、人指指から小指までが、まるで魔法使いの指のように見えたものだ。千枝子さんの家は、道が海岸と辻堂への岐れ道の所に田代自転車屋があり、海岸寄りに板橋屋さん（煙草、雑貨、駄菓子を売っていた小さな店で、たしか「おコイちゃんの店」とも言っていたと思う）との間で、田代自転車より一段と高かったので、堂々としたお邸のように思えた。

さて、いよいよ当日（八月十七日）町内の小父さん、若い衆、子供たち各町内に寄り合い、山車に集まる。小父さんた達の中には、昔の無法松の姿に腕に入墨をちらつかせている者も見える。当時の小父さん達は、入墨の人もかなり多く、背中一杯に龍の絵が描かれて、それを自慢に写真を撮らせている者もいたし、中年以上のお内儀さんの中には、「お歯黒」をつけた人もかなり居た。茶碗のようなものに、どろりとした黒豆の汁のようなものを入れ、それを歯に塗って黒く染め、既婚の証しとしたのであるが、誰だったか、それを舐めた者が「まーじい、まーじい、あんなもん舐めんもんじゃねぇや」とぼやいていたのを思い出す。若い衆は子供達に「わりゃあよーく見てんだぞいいかあ。うちのテーコは皮を張りけえたばっかりだからよう。響きがちがーだぁうからよう。うならかしちまーだあな。原だの刈田だのと並んだらよう。負けやあしねぇからよう」

やがて山車は、若い衆や小父さんが数名上に乗り、残りは、老若取り混ぜ、小父さんや古老の指導の下で、曳き綱を握る。笛吹きの小父さんは、酒瓶に漬けてあった笛を取り、口に当てる。山車の前面には太鼓が三基、その隣の柱のそばには、拍子取りの太鼓が一基それぞれ、若衆がついて、出発準備が完了する。「ヒュルルルルー・・・・」笛の前奏が鳴り始める。さあ出発だ。「そーれえっ」掛け声と共に山車は木の車をきしませ乍らがらがらごろごろと動き出す。仁徳天皇の人形が小刻みに揺れて、沿道を見下ろし乍ら、神明様に向かってゆっくりと歩を進める。笛の音色、太鼓の響きが絶妙のハーモニイをなし、祭り独特のローカル色を浮き彫りにしながら賑やかな行進が続いて行く。

当時は、自動車も滅多に通らず、ごてごてと電柱や電線がはりめぐされてはいなかったので、全体がのんびりと悠長であった。「止まれーっ」指揮していた小父さんが叫んだ。ここは見物の人がわりに多く集まってくる三叉路だ。若い衆は心得たとばかり打てば響くように、山車の止め木を外し、横棒を入れる。。「それそれそれ舞わせーっ」「よいしょよいしょ、わっせい、わっせい」横棒や山車にくっついた人々は勇ましい掛け声と共に山車を、その場でぐるぐる回し始める。山車は、車の部分を残して、人を乗せたまま、ぐるぐる回り始める。小手をかざした仁徳天皇も一緒に回り出す。太鼓は更に勢いを増して激しく叩かれる。と、別の方から太鼓の音が近付いてきた。「ほれえ、他の部落の奴が来たぞーう負けんなあ」やがて別の山車が近付いてきた。こちらは、わざと止まっている。先方の山車の曳き綱の先頭が、とうとう当方の山車にまで来てしまった。「やいやいやい。何してけつかんだ。さっさと行きゃがれっ」「何だと、わりゃあ後から来やがつて、何をでっけえ口を叩きやがんだあ。」祭りに喧嘩はつきものだ。忽ち何人もの無法松が入り乱れて撲り合う。今から考えると昔の農家の人々は、単調な野良仕事の明け暮れで、働けど働けど、我が暮らしゆたかならざりという生活で心のはけ口が無かったようだ。そこで、祭りの華と言われる喧嘩も、平素のストレス発散のためのリクリエーションだったかもしれない。というのは、今のような陰湿ないじめとは違って、引揚げの潮時をちゃんと心得ていたようで、後腐れがなかったようだ。やがて双方の山車は態勢を立て直し、何事も無かったかのように行進を始め、太鼓は山車二台分の威勢を轟かす。東海道線の踏切りを越えればもうすぐ神明様だ。各部落の山車は、それぞれ絢を競って東から、西から、南から集結する。

鳥居から、神殿までの参道には、刀やサーベルを吊るした玩具屋、風にからから音を立ててる風車屋、金魚売り、菊一文字の刃物屋が、所狭しと両側に立ち並ぶ中を、いかを煮る醤油の何とも言えぬうまそうな香りが、ぷーんと漂っている。老若男女打ち連れて、これらの店を冷やかし乍ら参詣を済ませ、三銭とか五銭とか小遣いを貰った子供達はそれぞれ、これをどう使おうかと、小さな頭をひねりつつ店を覗いて回る。昔は、それ程金の価値に対する認識が深かったのだ。だからこそ、この金で手に入れた物は貴重であり、自分の物になった喜びは大きかった。当節の子供達が何故こうも金に対する認識を失ってしま

ったのか。改めて考えさせられる。

堀川というところ

当時の鵠沼は、東海岸、西海岸、堀川、石上、新田、花沢町、原、刈田、大東、中東、宿庭、上村、宮ノ前等の小部落の集合体で、東海岸は別荘地帯、他は大半が農村地であった。

私が育った堀川は最も西側に位置し、引地川を隔てて辻堂に接した農村だった。引地川は現在より辻堂寄りを蛇行して流れており、川幅も狭く、両岸は雑草が水面を覆うように生い茂っていて雨の日は茶色く濁った水が渦を巻いて流れる不気味な川であった。大雨の時は忽ち溢れた水が堀川側の田を一大湖水と化し、辻堂に通じる一本道も水没したので、村の西端にあった竹内さんから数十米辻堂寄りの所から、田植え用の田舟を出して人を渡していた。川には木の橋がかかっており、橋を渡ると上り坂となった砂地の山で両側はうっそうとした松林が遠くまで続いていて、夜道などは、幽霊や山姥などが襲って来そうなムードがあり、兎や野狐等が生息していた。川にも当時は川うそが居た。橋のたもとには民家が二軒しか無く、相沢久子さんと相沢フミさんが同級生だった。相沢さんの家は土建屋さんで、引地川を当時の町長一木与十郎氏が、現在の川に大きく改修したとき、その工事を請負ったと聞いている。（昭和七・八年頃と思う）相沢さんのことを何故か我々は明治館と呼んでいたが、明治時代に旅館でもしていたのであろうか。久子さんの弟に兼雄さんが二級下に居たが、引地川が増水した時、橋から転落し、ずっと下流の砂山の所で兄さんに助けられたが、落ちた瞬間失神状態になったため、水を一滴も飲まなかったので、奇蹟的に助かったという。砂山というのは、松林の中でこの部分だけ植物がない砂の傾斜が川まで下りていて、我々は探検気分でここへ行き、お山の大将ごっこを興じたり、川べりに下りて湧き水を飲んだりしたものである。竹内さんから相沢さんまで約二百位だったか辻堂に抜ける道は一直線の細い道で、両側は田んぼで、その中央を灌漑用の小川が横切っていたが、ここから松林を越えて眺める夕焼け富士は、誠に美しく数ある田園風景の中では、絶景といえるものであった。今はこれを知る人も少なくなっている。この小川の付近に夏の夕暮れ時に佇んでいると、塒に向かう前の夕食に蚊や羽虫を取るのであろうか、や

んま（当時我々は「おんじょ」と呼んでいた）の大群が空を覆うように南に北に飛び交う風景が見られた。また、こんな小川でも当時は、めだか、泥鰌、鮒、鯰等が無数に獲れ、初夏には蛍が群れ飛び、家の中にも蛍やこうもり等まで舞い込んできたものだった。

また、この道路の竹内さんから反対方向の東へ百米余り行った所に十字路があり、我々は「辻」と呼んでいたが、北側の西は葉山又兵衛さんの邸の石垣が終わる角で、東は、又兵衛さんの長女八重子さんの嫁入り先の高井さんの家が後から建てられ、南側は畑と野原になっていて夏は褌一つでこの畑や野原の間をかしましいきりぎりすやがしゃ（くつわ虫のこと）の声を聞いたり、無数のバッタが驚いて逃げるのを見乍ら浜へ行ったものだ。

私の家は北側が近藤さんで、家の横の道を北へ行くと、近藤さんの少し先の左側に田中さんの家が一軒あるきりで、その先の左側は小高い松林、右側は一段低い畑で途中こんもりした中に墓があって、民家までは、かなりの距離に感じた。　夜、この道を歩く時は、今のような街灯などは全くなく提灯のほの暗い光が妙に陰にこもって恐ろしく、お墓の前に来ると目をつむって駆け抜けたものだ。ずっと行って、小早川さんという床屋さんと通称「タイワン店」という小坂さんの酒屋兼煙草・雑貨屋さんに来ると、ほっとした。私が煙草（ゴールデンバットが七銭）を買うと、品の良い婆さんが、「ボンさんには今日は何を上げましょうかね」と言い乍ら、飴玉か、キャラメルのばらを駄賃にくれたのがとても嬉しかったので、今でも鮮明に思い出される。

さて堀川では、浅場姓の人が比較的多く「アラヤ」「ニイヤ」のマーちゃんなど呼んでいたが、これは分家して新しく独立して家を建て「新家（または屋）？」の読み方を次々と変えていった為であろうか。その他懐かしい名としては、渡辺、山口他、相沢、葉山、八木、宮崎（精米所で通称「カシャ」と呼んだ。もう一軒「カンゴヤ」という宮崎姓もあった）田中、板橋、赤羽、番場等の名が挙げられる。通称「ギン」さんと呼ばれた文江さんの実家渡辺さんの隣には用水池があり、食用蛙がたくさんいて「グォーグォー」と不気味な声で鳴いていた。この池と道路を隔てて「オメカさん」と呼ばれる店があり鰻やら駄菓子を売っていたが、特に思い出す駄菓子として懐かしいものは、三角の紙袋に入った南京豆、蛤の殻の中に白やピンクの粉菓子を入れて、紙テープの帯封をしたもの、ろう紙のチューブに水飴を入れてあり、チューブをしごき乍ら飲むようになっていたもの、バラに

なったキャラメルの裏に、各国の旗を印刷したボール紙があり、何枚かためると、景品と交換してくれるものなどがあった。この店は、母と息子の二人暮らしだったようだが、或日私が母と通りかかると、おばさんが頭に繃帯のように手拭を巻いていたので母か「おばさん、どうしたの？」と聞いたら「いぇね、〇〇さんとこで息子の悪口を言ったんで、どんなとこが悪いか聞きに行ったら、あべこべに殴られちまったですよ」と言っていた。この息子は当時私より二つ三つ年上だったが、気が弱く人が良さそうだったので、よくいじめられ泣かされたようで、息子に異常な愛情を持っていた母親は、その都度怒鳴り込みに行ったらしい。よく悪童連が「屁ぇひったのオメーカー」と言って囃し立てていたが、後で解ったことは「オメカ」というのは、お妾さんのことであったらしく、当時は妾の子は庶子として差別され、総理大臣近衛さんの愛妾ですら、近衛邸へは表玄関から入れなかったようで、今にして思えば、誠に気の毒であった。

堀川は、また地域によって、西っちょ、東っちょ、なんや、の三地区に分れていたが、私は西っちょに属したいた。東っちょには、村人には馴染み深い尼寺があり（尼寺については稿を改めて書く予定、当時は慈教庵といった）この寺の東側は、当時（昭和七年まで）は小田急も通っておらず松林であったが、やや小高くなっており、地質が砂だったためか、太い根が露出して、子供がトンネルのように下をくぐったり、腰掛けて足をぶらぶらさせたり、絶好の子供の遊び場であった。以上のような、子供にとって貴重な遊び場であり、素朴な情操を養ってくれた自然は跡形もなく失せ、人家の蜜集地と化している。これは、無定見な経済成長政策による大都市集中型社会機構が、企業の拡張 —— 増員 —— 住宅不足 —— 開発という自転車操業的悪循環を生み出し乍ら、過密、過疎のアンバランスを大きく拡げ、過密地では人間ブロイラーとも言える環境に大衆を追い込んで、教育荒廃の大きな要因をなしている。嘆かわしい哉！

上棟式

当時の堀川は、上棟式の時は必ず「餅なげ」（他にもこの儀式をする所は多かった）があった。直径十㌢位の丸い平たい餅をたくさん作り「四方餅」といって、紅白の西洋皿のような大型の餅を四枚（東西南北に投げ分ける）、その他、半紙に硬貨を包んだものや蜜柑などを、いくっかの籠に一杯入れて棟の上から集まった人にばらまいて喜びを分けるというもので、特に、四方餅を拾った人は縁起が良いというので、それが飛んできそうな所を探して陣取る人もあったようだ。この四方餅については、私には忘れられない思い出がある。平本さんの建て前の時は、私の家の温室の近くに飛んできた。未だ私が五、六才だったと思う。私は体毎その餅の上においかぶさり、餅をしっかり抱きしめた。この時、カンゴヤのマーチャンが横から私の胸に手を入れて餅の端を指でつかみ「このもちぁおれんだぞおれが先だぞっ」と強引にひったくろうとした。私は死んでも離すもんかと、地面に伏せた形で餅にしがみついていた。マーチャンは尚も「俺んだぞ」とわめきたてる。私は物も言わず渡してなるものかとしがみついたまま。見ていた板橋のノブちゃんが、たまりかねて「よう、そのもちゃあ、ちっちぇえ奴のもんだよ。渡してやんな」と数回注意してくれて、やっと私のものになった。マーちゃんは、恨めしそうに、しかし意外にあっさり、立ち上がった私の肩を叩いて「ハジメちゃん、うめーことやったな」と二回繰り返して立ち去った。私は、ほっとしたと同時に激しい心臓の鼓動が聞こえ、それは当分治まらなかった。餅投げ開始前に、神主さんの祝詞とお祓いがあり、終わって勇壮な木遣り歌が歌われる。これが終わると餅投げだ。群衆は固唾を飲んで終わるのを待つ。いよいよ開始、私はお隣の誼で棟の上に上がらせて貰ったが、餅の一杯入った籠が後から後から上がってくる。餅は小父さんたちによって雨霰とばらまかれる。地上の群衆は、その度に大波のように揺れ動く。私も蜜柑を取って投げようと構えると下にいた平本のミサちゃん他数名の女の子が、「ほらー、ほらー」と叫び乍ら手を叩いてぴょんぴょん跳びはねる。投げると周りからわっと群がってくる。このようにして、はでやかな餅投げが終わると、大人たちは手に手に拾った餅を二、三十個位持っている。「あたいこんなに取っちゃった」私と同年の田中ミキちゃんが、得意そうに見せた餅の数は六個だった。幼児でさえこれだけ取れる程たくさんばらまかれたものだ。

終わり

「鵠沼」第６７号
平成５年３月９日発行

鵠沼の思い出（続）

若尾　　肇

ご注意：本紙（機関紙）の文章を引用される方は、必ず出典を明記して下さい。

編集・発行　　鵠沼を語る会

鵠　沼　公　民　館
電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34